小田原市　愛宕山（あたごやま）遺跡　第Ⅱ地点

—大型掘立柱建物址の調査—

浅賀（あさが）　貴広（たかひろ）

所 在 地　小田原市城山一丁目450番イ外
調査機関　株式会社　盤古堂
調査担当　小池　聡
調査原因　集合住宅建設に伴う事前調査
調査期間　2006年4月12日～7月15日
調査面積　約1020㎡

1．遺跡の立地

調査地点は小田原駅の西約 50mに位置している。小田原城総構内にあり、近世小田原城谷津口にあたる。

本遺跡は通称愛宕山と呼ばれている丘陵上に立地している。愛宕山の呼称の由来は丘陵上に愛宕社が存在していたことである。江戸時代の天保年間（1830～1843）に成立した『新編相模国風土記稿』によると安国寺、愛宕社が記載されており、小田原城の絵図にも描かれている。

地理的にみると、この愛宕山の南・東は現在新幹線が通るなど、後世の開発により丘陵自体が削平されてしまっているが、箱根山から続く丘陵の南東端の丘陵に位置し調査地点の北・東側は削平されており、低地との比高差は約８～９ｍを測る。

本遺跡第Ⅰ地点では腰曲輪と推定される位置を調査し、18 世紀代の陶磁器が井戸址より出土し、良好な一括資料を提示している。

2．調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、集合住宅建設開発に先立つ事前調査である。開発者と株式会社盤古堂が業務委託契約を結び、2006年4月１２日から7月 15 日にかけて現地調査を行なった。

第１図　調査位置図（1/10,000）

現地調査は、弥生時代、古代、中世、近世の遺構確認・調査を行なった後、さらに切土が行われる調査区の西側半分の縄文時代の遺物包含層を掘削し、検出遺構を調査した。その後、旧石器時代の遺物の有無を確認するため試掘坑を設定し、掘削を行なった。

3．調査の概要

調査区は東西約 40m、南北約 28mの五角形である。西が高く東が低い丘陵の東側斜面に位置し、調査区内確認面での東西比高差は約４ｍを測る。

旧石器時代　縄文時代の遺物包含層を掘削途中で安山岩製の有樋尖頭器が１点出土した。このため、旧石器時代を対象とした試掘調査を行なったが、遺構・遺物ともに検出できなかった。有樋尖頭器は小田原市域では始めての検出である。

縄文時代　縄文時代の調査は切り土造成工事が行われる西側半分のみを対象として行なった。検出された遺構は、竪穴状遺構２基、土坑 10 基、炉穴群１群を調査した。炉穴群は集中的に密集して構築され、重複が著しい。早期末の条痕文系土器が出土している。炉穴群は小田原市域では始めて

の検出である。竪穴状遺構と土坑は前期花積下層式～関山式期の遺構と考えられ、該期の遺物包含層も形成されている。

弥生時代　弥生時代は、竪穴住居址 10 軒、溝（環壕）１条、土坑２基を調査した。竪穴住居址は第４・５号住居址と第２・３・10・11 号住居址が重複していた。特に第２・３・10・11 号住居址は地震による地割れが床面を壊しており、それを造り直している。竪穴住居址出土土器は破片資料が多いが、第９号竪穴住居址床面からは高坏・壺口縁部が出土している。

環壕は地形の傾斜に沿うようにして掘られている。中層から３個体の壷が出土し、その内１点は静岡県、東遠江系の菊川式土器である。なお、胴部に焼成後に穿孔されたものが１点含まれている。以上の土器は弥生時代後期中葉に比定される。

出土遺物は後期の土器のみであり、集落の存続時期は弥生時代後期である。

古代　古代は掘立柱建物址３棟調査した。３棟とも主軸方位は N－66° E で東西方向に長い側柱建物である。第１号掘立柱建物址は３×３間で、梁行約 4.2m、桁行き約６ｍを測る。第２号掘立柱建物址は３×４間で、梁行約 5.1m、桁行約 7.5ｍを測る。第３号建物址は２以上×４以上間で検出長は 4.8m、6.8m以上を測る。柱堀方の規模は第１号掘立建物址が約 75～135cm、第２号掘立建柱建物址は約 100～140cm、第３号掘立柱建物址は約 90～130cm を測る。第３号掘立柱建物址は柱間距離・柱掘方規模が第２号掘立柱建物址とほぼ等しいため、両建物は同規模（同企画）の掘立柱建物址と考えられる。また３棟とも柱を抜き取ったときの穴が確認でき、柱の痕跡は残っていない。

第１号掘立柱建物址は２号・３号より一回り小さいが、３棟ともに主軸方位がほぼ一致し、南側の棟通りが通っていることから同じ計画に則って建てられたものであると考えられる。第１号掘立柱建物址と第２号掘立柱建物址の間は約３ｍ、第２号掘立柱建物址と第３号掘立柱建物址の間は約 3.5ｍの間隔が空いている。

第２号溝状遺構は覆土の上層が硬化しており、底面両側に側溝となる小溝を有していることから道路として機能していたと考えられる。主軸包囲は N－28° W であり、ほぼ掘建柱建物群の桁方向と同一方向であること、覆土が掘立柱建物址と似ていることから掘立柱建物群と同時に機能していたと考えられる。第１号掘立柱建物址からの距離は約９ｍを測る。

中世　中世の検出遺構は掘立柱建物址１棟、溝（堀）１条である。掘立柱建物址は２×２軒であるが、桁通りの中の柱は、西側は外で飛び出し東側は検出できないやや不規則な柱配置をしている。

堀は西に湾曲している。出土遺物が少ないが、形態などから中世の所産と考えられる。中世の堀としては未知の堀であり、中世の小田原城の縄張りを復元する一資料である。

近世　近世の遺構は、調査区の北側で段切り状遺構１基、調査区全体で地境の根切りと推定されるものである。段切り遺構は 17 世紀後半から 18 世紀前半の時期である。その他の溝状遺構からは 18 世紀代の遺物が出土しており、形態から根切りの溝として機能していたと考えられる。江戸時代前期頃から現状と同じく畑作を行なっていた可能性がある。それを裏付けるように近世の絵図でも畑の中に本地点はあると比定できる。

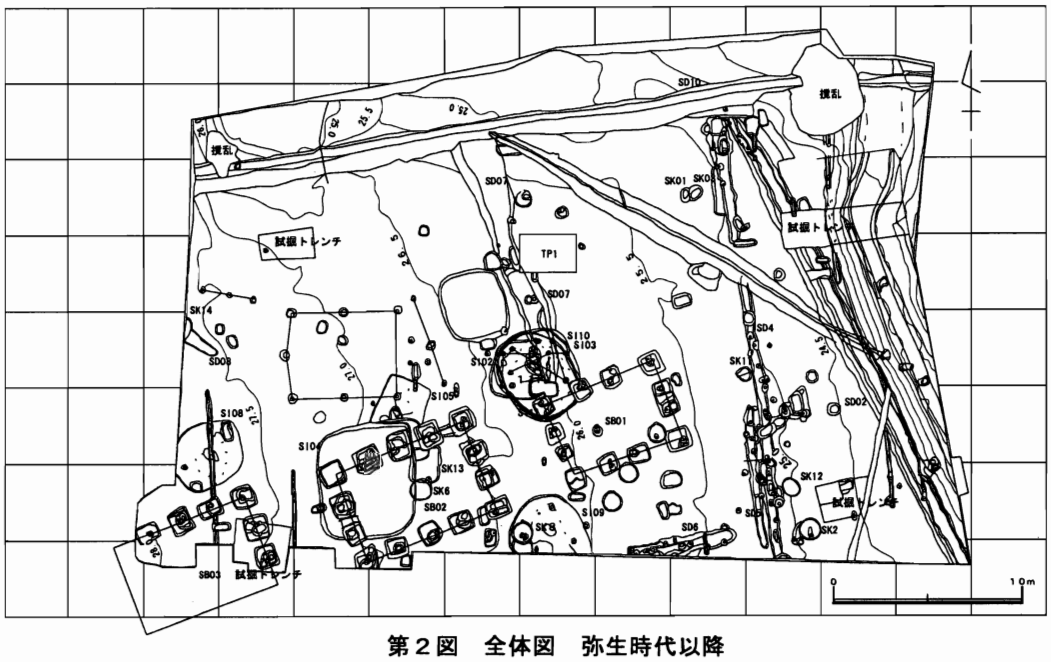
４．まとめ

本地点の調査成果は各時代を通じて数多くあるが、箱根丘陵の東南端に位置し、東に足柄平野が広がり、南には太平洋が望める位置に立地している。

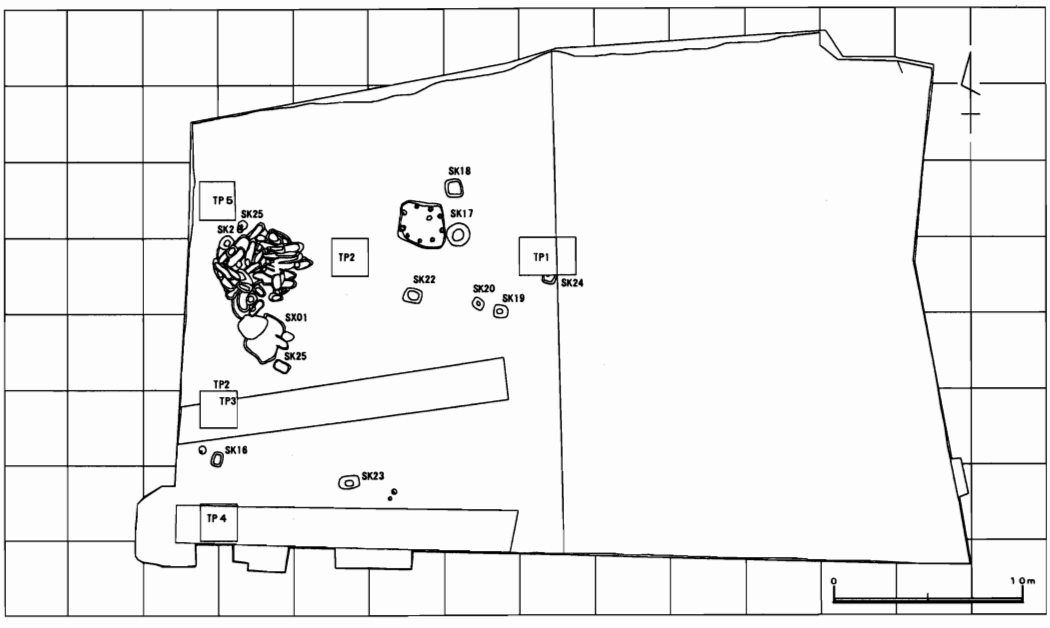
弥生時代の環濠集落・古代の掘立柱建物群の性格を考える時には、重要な立地条件であると言える。古代では南側に推定「筥荷道（はこねみち）」が通り、陸

上・水上交通の要所にあったと推定される。

古代と推定される掘立柱建物址３棟は建物の規模が大きいこと、柱をいけるために方形の掘方を掘っていること、掘方間の一部が溝で連結されること、推定される柱間の距離が整数尺であること、建物同士配置の計画性などから一般的な集落で検出されるような建物でなかったといえる。また土器など古代に比定できる出土遺物は１点も出土しておらず、本地点が土器などを廃棄するような場ではなかったと考えられる。上記したような立地条件を加えると地方の官衙的な施設など当時にあっても重要な地であったと考えたい。



第２図　全体図　弥生時代以降



第３図　全体図　縄文時代

写真１　調査区全景（上が北）

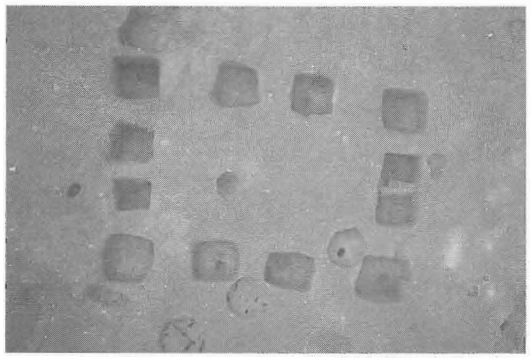


写真２　第１号掘立柱建物跡（上が北）

写真３　第２号掘立柱建物跡（上が北）

写真４　道状遺構（北から）

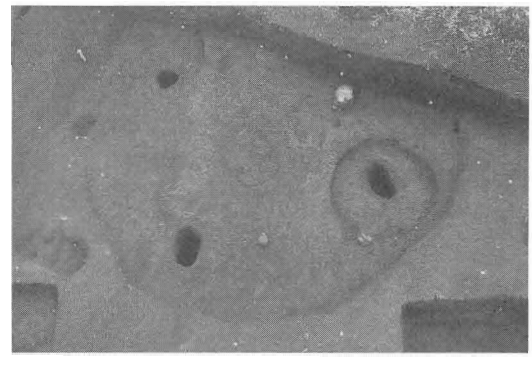


写真５　第９号竪穴住居址（北から）

鎌倉市　今小路西遺跡

—武家屋敷跡と古代遺構の調査—

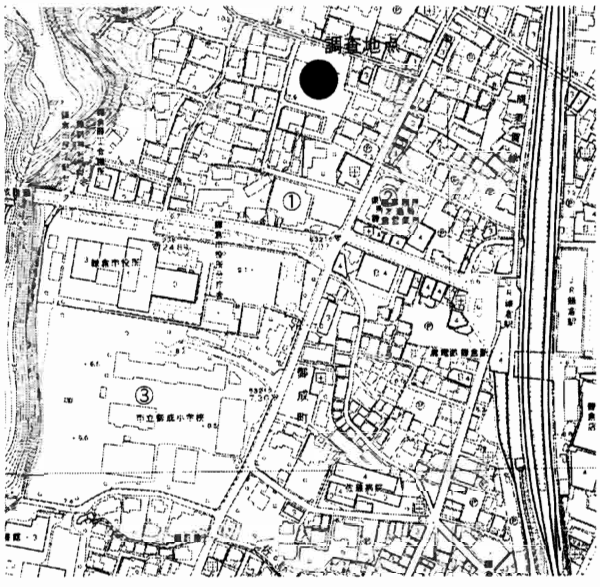
菊川 英政

所 在 地　鎌倉市御成町171番１外
調査機関　㈱斉藤建設・文化財事業部
調査担当　菊川英政
調査原因　集合住宅の建設
調査期間　2006年９月11日～2007年５月21日
調査面積　約1,640㎡

１．遺跡の立地

調査地点は、JR線鎌倉駅の北西約250m、源氏山南麓に入り込む無量寺谷の開口部前面にあり、鎌倉旧市街に広がる沖積低地の中央西寄りに位置している。

遺跡地周辺は古くから寺院あるいは武家屋敷であったとの伝承が残る場所で、「扇ヶ谷村絵図」（天保三年、1832）には「無量寺」、「鶴岡八幡宮領并往還谷々小道分間図」（江戸末期）には「千葉地」と記されている。無量寺は「覚園寺文書」正和三（1314）記事に名前が見え、鎌倉時代後期には実在した寺院であるが、正確な場所や創建・廃絶年は不明。中世寺院であれば、多くが谷内に伽藍を配したはずで、本地点に堂舎があったかは疑問が残る。一方、千葉地は江戸期の地誌『新編鎌倉志』（貞享二年、1685）に「千葉屋敷は天狗堂（現、御成小学校裏山）の東の畠」とするが、『吾妻鏡』建保元年（1213）条ほかでは、千葉氏の屋敷地は甘縄にあったことが知られている。現在の甘縄は遺跡の南西1.2km、長谷甘縄神社辺りを指すが、鎌倉時代の甘縄が今より広く、本地点を含んだかは判らない。「千葉地」の名は、昭和30年頃までは小字として残っていたようである。



第１図　調査位置図

近隣の代表的調査事例としては、①千葉地遺跡（現、紀ノ国屋スーパー）が1980年、②千葉地東遺跡（現、神奈川県企業庁水道局）と③今小路西遺跡（現、御成小学校内）が1984年に相次いで調査され、その成果が公刊されている。

２．調査方法と堆積土層

掘削残土の集積・搬出場所を確保する必要上、調査範囲をⅠ～Ⅲ区に区切り、順次調査を行った。また、古代の調査は予想していた掘削深度を超えたため、周囲壁から安全距離をとり内側に調査区を設定した。

現況地表は海抜8.6m前後。調査区北西～南東に向かって僅かに傾斜し下る地形である。第１面は海抜7.2～7.1m、第２面は海抜7.0～6.8m、第３面は海抜6.8～6.5m、中世最下面となる第４面は海抜6.7～6.3m。古代遺構の掘り込み面である

第５面は海抜6.5～5.8mであるが、同レベルでは確認難しく海抜 6.0～5.7mの青灰色砂層まで掘り下げ調査を行った。

３．調査の概要

中世の調査　整地層（生活面）の状態は一様でなく、部分的な貼り増しや区画ごとの整地が行われ、火災を受けた痕跡も見られた。

第１面：掘立柱建物３棟、礎石建物１棟、井戸１基、土坑３穴、溝３条（木組・石組）、道路状遺構１基（東西）。14世紀代

第２面：掘立柱建物 14 棟、礎石建物１棟、井戸４基、土坑28穴、溝７条（東西）、木組遺構10ヶ所。14世紀前葉～中葉。火災。

第３面：掘立柱建物 15 棟、礎石建物１棟、井戸２基、土坑56穴、溝４条（東西・南北）、道路状遺構２基（東西・南北）、木組遺構10ヶ所、網代塀２ヶ所。13世紀後葉。火災。

第４面：掘立柱建物７棟、礎石建物０棟、井戸14ヶ所、土坑181穴、溝９条（東西・南北）、木組遺構４ヶ所。13世紀中葉。

第２面～第３面にかけては、最も建物の重複激しく頻繁な建て替えが行われた時期で、梁行５間×桁行７間の他、５間×６間、５間×５間、３方に縁をもつ４間×７間の建物など、梁行４間以上の建物が18棟も見つかった。一方、第４面については予定工程の大幅な遅れで十分な調査ができず、建物配置や井戸・土坑の帰属に問題を残す結果となった。

古代の調査　掘立柱建物10棟、竪穴住居１軒、溝13条の他に、埋没河川の一部を確認した。

掘立柱建物：側柱建物と総柱建物があり、側柱建物には「溝持ち」型となるものが４棟含まれる。また、礎板代わりや根固めとして、瓦を柱穴に入れた建物も見られた。

竪穴住居：５m×５m規模の方形。竈は北西壁に作られたようだが、中世の井戸に壊され消滅。

溝：東西・南北方向の他に、調査区内で屈折し「L」形に伸びる溝がある。溝の規模は大きいもので幅1.2m×深さ50㎝程度。断面は箱形ないし逆台形に近いものが多い。

埋没河川：河川の肩はなだらかで最も広い部分は13m、狭い部分では4.5m、深さは調査区北壁で約１mを計測する。

古代遺構はⅠ期～Ⅵ期の時期区分を行った。

Ⅰ期：埋没河川

Ⅱ期：溝２条

Ⅲ期：竪穴住居、溝２条。７世紀中葉。

Ⅳ期：総柱建物、溝１条。７世紀後葉～末。

Ⅴ期：側柱建物、溝１条。８世紀代。

Ⅵ期：側柱建物（瓦）、溝１条。９世紀以降。

（その他の溝はⅤ～Ⅵ期のものが多い。）

４．まとめにかえて

鎌倉市街地で1,500㎡を超える調査は稀にしかなく、膨大な資料が一気に溢れ出てきた感がある。これらを十分整理し「まとめ」とするには至っていないのが実情であり、課題となる問題点をあげてご教示を仰ぎたい。

発見された中世の遺構群は、大型の武家屋敷の一画と考えている。また、仏具類も数点出土しており、小規模な持仏堂の存在が推測できる。

⇒　誰の屋敷か？囲炉裏が並ぶ建物の居住者は？木組遺構は区画 or 建物の一部？

中世以前では、古墳時代後期の竪穴住居が消えた（廃絶 or 移転）後、「倉、クラ」と考える総柱建物が建ち、８世紀には側柱建物に変化する。

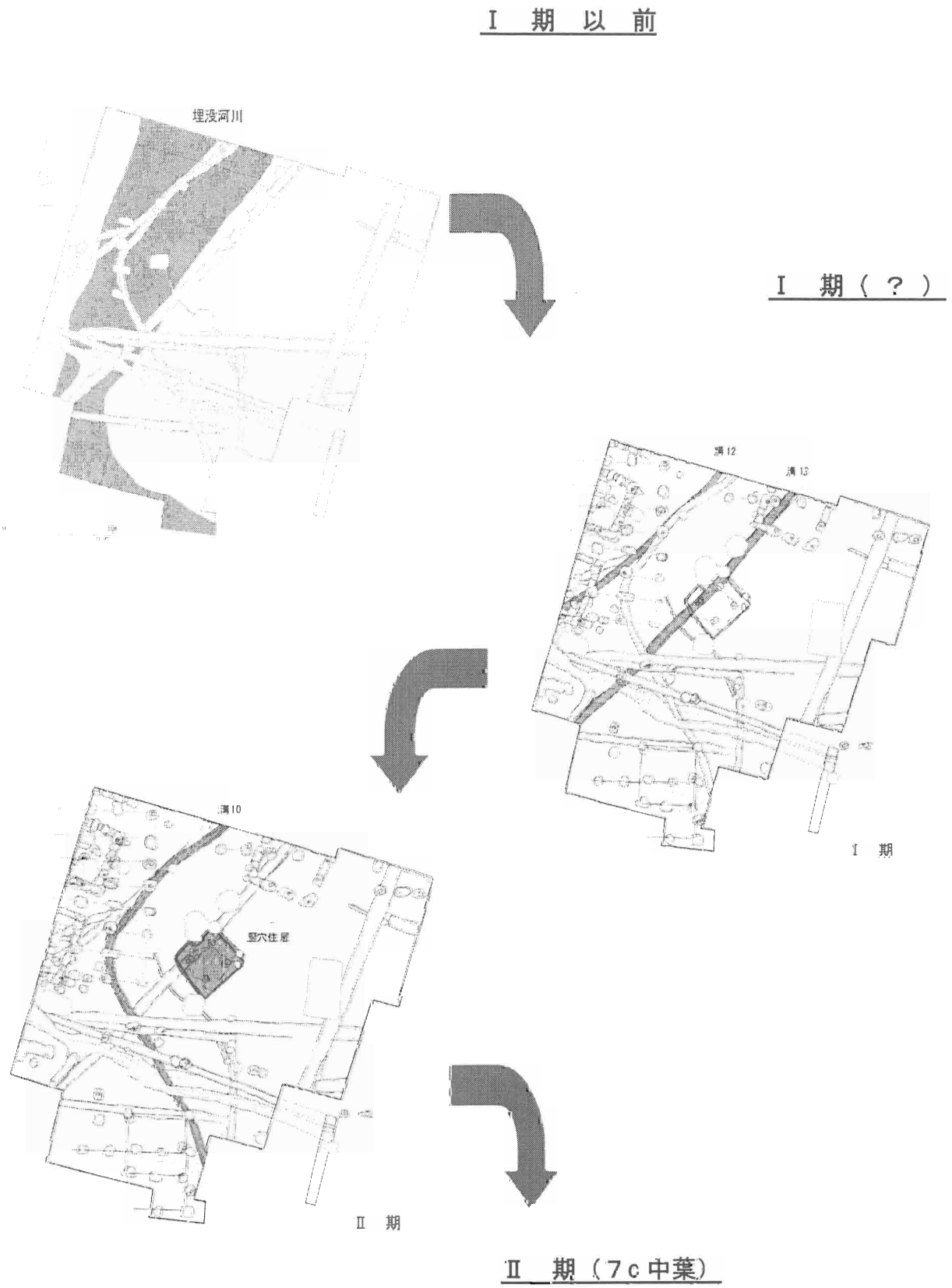
⇒　鎌倉郡衙（Ⅰ期、天平五年銘木簡）に先行する倉の存在、側柱建物は「屋、オク」か？瓦は転用、古代寺院は未確認。

第２面遺構全体図

第２図　中世遺構配置図（第２面）

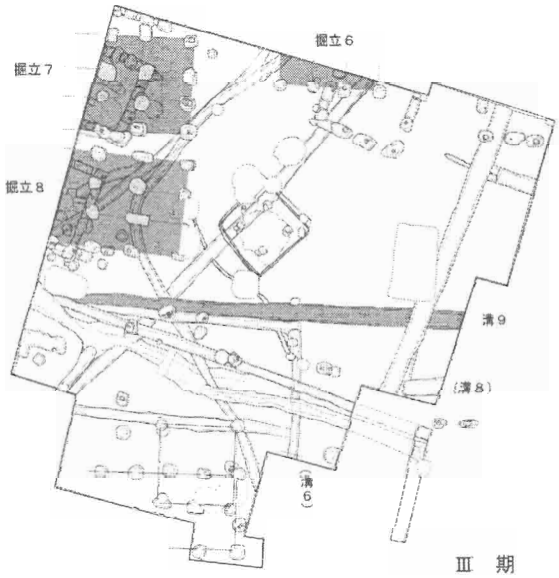
第３面遺構全体図

第３図　中世遺構配置図（第３面）



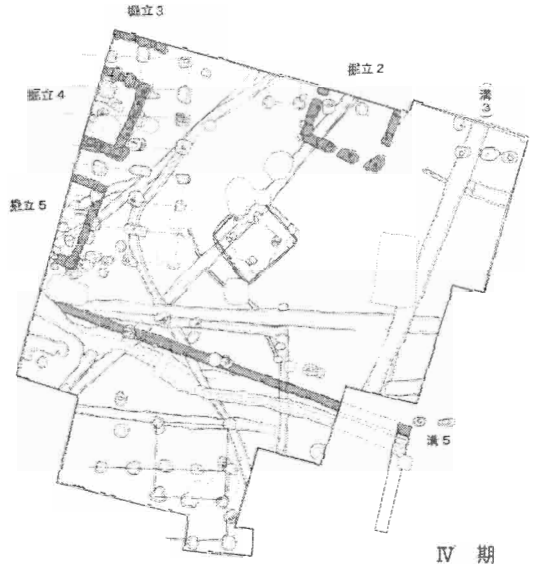
第4図　古代遺構変遷図1

Ⅲ　期（7c後葉～末）

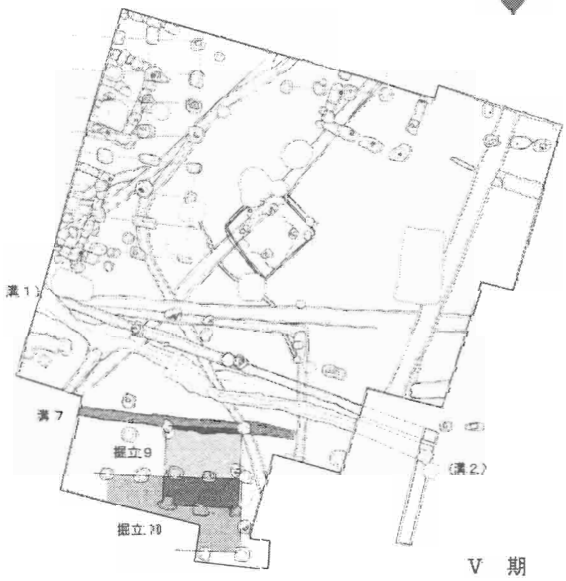


Ⅲ　期

Ⅳ　期（8c代）



Ⅳ　期



Ⅴ　期

Ⅴ　期（9c以降）

第５図　古代遺構変遷図２

小田原市　大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点

―小田原城内の武家屋敷―

小山　裕之

所 在 地　小田原市本町一丁目138番
調査機関　玉川文化財研究所
調査担当　小山裕之
調査原因　（仮称）城下町ホール建設に伴う事前調査
調査期間　2006年4月1日～2007年3月31日
調査面積　3,000㎡

1．遺跡の立地と環境

小田原城は箱根外輪山から足柄平野に向かって延びる丘陵先端部南側に占地し、南西側に早川、北東側には久野川と酒匂川とが下流し、南側は相模灘に面している。

後北条期の小田原城域は北西端の小峰小鐘ノ台から派生した天神山・御鐘ノ台・八幡山の三つの丘陵と相模川に面した沖積低地におよび、これらを堀と土塁により構成された周囲9㎞におよぶ総構えが取り囲んでいた。

江戸時代に入ると丘陵部と三の丸が御留山となり、低地部を中心に城域が展開されることになる。低地部三の丸には城門や家老屋敷、藩役所である御用所が配置された。また、城下には東海道と東海道を起点として北に向かう甲州道が整備され、この両街道沿いに面して町屋が形成されていた。

調査対象となる地点を藩政期小田原城絵図群から見ると、「田辺図」（1660年）では「稲葉七郎兵衛」、「松原図」（延宝～天和）では「稲葉酒之允」、「静嘉堂元禄図」（元禄～宝永）では「加藤孫太夫」、「文政図」（1823年）・「文久図」（1861～1863年）では本遺跡名となった大久保弥六郎の屋敷地あるいは杉浦平太夫の屋敷地の一部であったことが見て取れる。

第１図　調査位置図(1/25,000)

中世期は古地図が知られていないため状況は判然としなかったが、先年に調査が行われた杉浦平太夫第Ⅳ地点と合わせて多数の遺構が検出されており、後北条期の土地利用のあり方が解明されようとしている。

2．調査に至る経緯と経過

今回の調査は（仮称）城下町ホール建設に伴う埋蔵文化財の事前調査として実施されたものである。城下町ホール建設予定地は近世小田原城三の丸内の藩役所や重臣屋敷が建ち並んでいた区域にあたり、武家屋敷に関わる遺構の存在が予想されることから、事前に本格調査が必要となった。

調査は事業者と委託契約を結んだ玉川文化財研

究所が中心に行った。(仮称) 城下町ホール建設予定地内には複数の屋敷地が含まれており、今回報告する地点 (旧小田原警察署跡地) は文久図 (1861～1863年頃) の屋敷割り図によると大久保弥六郎の屋敷地に相当することから、遺跡名を大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点として調査を行った。

調査経緯は (仮称) 城下町ホール建設予定地内に残存している解体予定建物 (警ら隊分駐所および消防署本部建物等) の除却工事や切り回し道路建設予定に基づき、調査区を5分割して行うこととした。現地調査は平成18年4月1日から開始し、平成19年3月31日をもって終了した。

3. 調査の概要

本遺跡では中世後北条期 (16世紀後半) から近世江戸期 (17世紀～19世紀前半) におよぶ遺構群が重層的に検出された。よって調査は各時期ごとの遺構分布状況を把握することを目的として時期ごとに遺構確認面を設定して行った。その結果、最古の遺構確認面 (後北条期) までに調査した面はⅣ面に達した。以下、各遺構面で検出された遺構群および遺物について概略する。

第Ⅰ・Ⅱ面 (18世紀～19世紀代)

本地点は城下町ホール建設予定地内で最も標高の高い微高地上にあたり、そのためにⅠ・Ⅱ面(18世紀代と19世紀代)が同一レベルでの生活面となっている。

この時代の遺構としては礎石建物の礎石、門の礎石、大形土坑(廃棄土坑)、石組み遺構等が主要な遺構となり、総体として屋敷を構成する遺構群が検出された。また，調査区東端からは性格不明の大規模な集石が検出されており，集石内からは17 世紀前半～19 世紀代前半の年代幅を持つ陶磁器類が廃棄された状態で検出されている。肥前系磁器の中には延宝様式の染付磁器や盛期鍋島の染付磁器皿などの高級磁器類が少なからず含まれており，使用者の階級の高さを感じさせる。

その他では，「杉浦」「大久保」の焼継ぎ朱書きが施されている肥前系磁器破片も数点含まれていた。

調査当初、遺構群は江戸時代後期、文久図で示されている大久保家の屋敷に関連する遺構と思われたが、焼継ぎ朱書きに「杉浦」と書かれた磁器が数点含まれている点や大久保邸と杉浦邸の屋敷境が検出されない点から、検出された遺構群は杉浦平太夫邸に帰属する可能性も考えられる。

第Ⅲ面 (17世紀代)

この時期の遺構群は杉浦平太夫邸跡第Ⅳ地点と同様に希薄であり、調査区中央付近で大形の不整形な廃棄土坑が検出されたに過ぎない。覆土からは初期伊万里・舶載磁器を含む陶磁器類が出土しており、遺物から判断すると廃棄年代は17世紀第2四半期頃と考えられる。

これらに類似する遺構群は杉浦平太夫第Ⅳ地点の調査時にも検出されており，やはり初期伊万里や志野皿等，江戸時代前期の様相を示すとともに，出土位置についても大久保邸で検出された位置からほぼ正方位の北方向から検出されており，分布状況に共通性を感じさせる。

当時、稲葉氏による小田原城の近世城郭整備が各所で行われており、廃棄土坑と城郭整備工事との関わりやあるいは天災により生じた家屋等の倒壊を除却した可能性が指摘される。

第Ⅳ面 (16世紀後半)

この時代の遺構としては石積側溝付道路、建物を構成すると考えられる柱穴群、方形竪穴状遺構、井戸(石組石積・素掘り)、石列、溝が主要な遺構であり、出土遺物は中国産の白磁・染付磁器、瀬戸・美濃Ⅲ大窯期の製品を主とした施釉陶器類、

かわらけ類など 16 世紀中葉以降の製品が多く出土している。

上記した遺構群の中で特に注目される遺構としては石積側溝砂利敷道路が挙げられる。石積側溝付道路は走行方位をほぼ正方位の東西に指針し、砂利敷道路の両側に川原石による石積側溝を付加した道路である。

砂利敷き部分は近現代の建物により破壊されている部分もあるが、規模は砂利敷道路幅４m、石積側溝北・南幅 1m を加えると、6m幅を測り、調査範囲内での総延長は 120m にも及ぶ。

４．まとめ

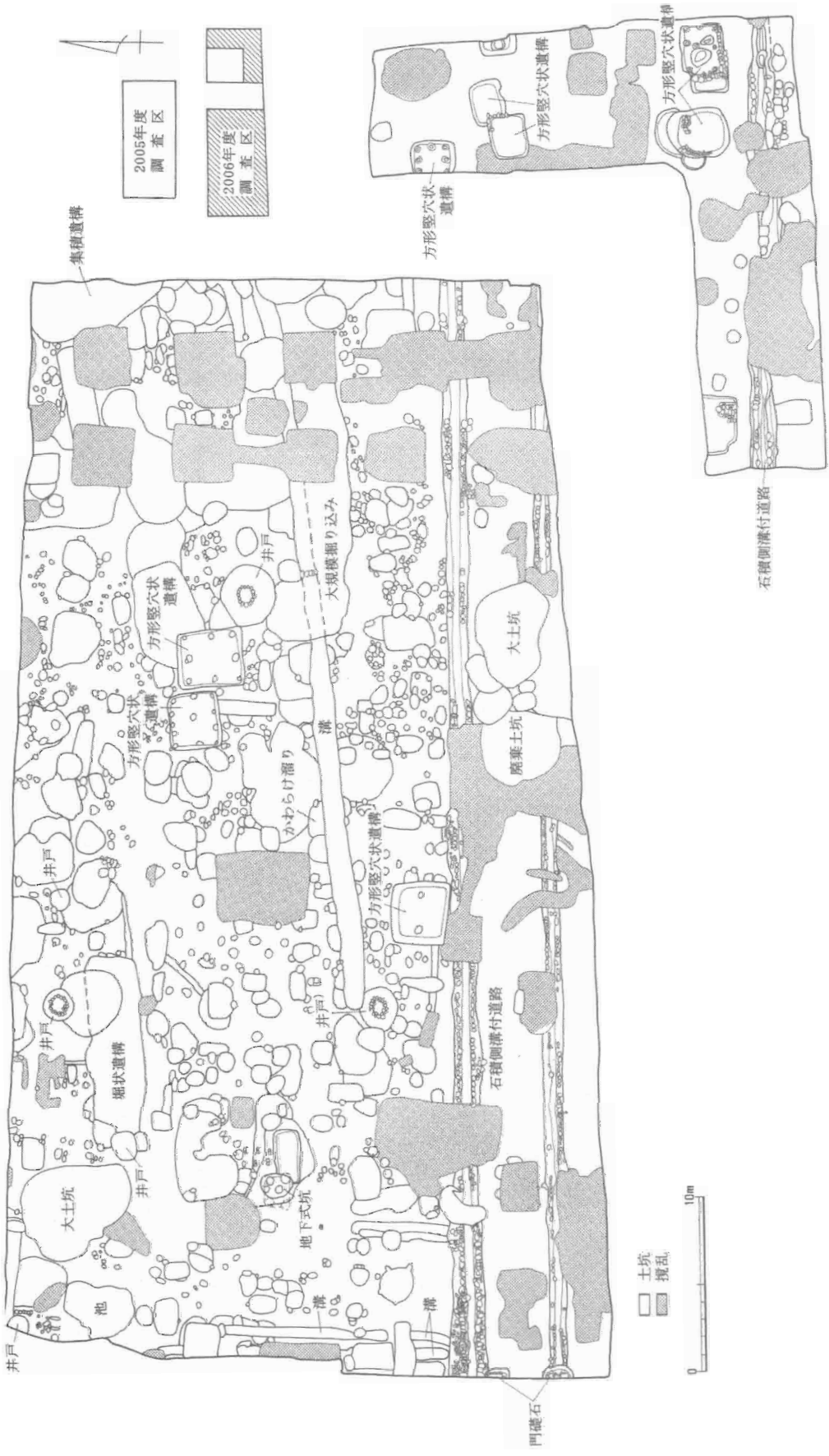
大久保弥六郎邸跡の調査は今回で３地点を数え調査面積では最大の調査となった。部分的に近現代の建物基礎も存在していたものの、礎石建物跡や門などの礎石、配石遺構などを確認することが出来、武家屋敷の構造を解明する上で貴重な資料をもたらした。

しかしながら杉浦の朱書きがある遺物の存在は，遺構群が杉浦平太夫邸に帰属する事も考えられ、従来想定されてきた大久保弥六郎邸の屋敷地はさらに南方に展開していた可能性も指摘される。

また、後北条期の石積側溝付道路の検出は本例が初例となるが、同様の構造を有する遺構の片鱗と推定される遺構が他地点で知られており、その方向は東西もしくは南北に限定されている。これらの調査例を総合して考えれば後北条期の小田原には正方位を基調とする道路網が存在していたとの想定が可能である。

この石積側溝付道路の北側には掘立柱建物址や方形竪穴が道路方向と辺を合わせる形で展開しており、規則的な屋敷割あるいは町割が復元可能と思われる。

写真１　調査区から小田原城本丸を望む



大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点　第Ⅲ・Ⅳ面遺構全測図

写真２　第Ⅰ・Ⅱ面　門礎石

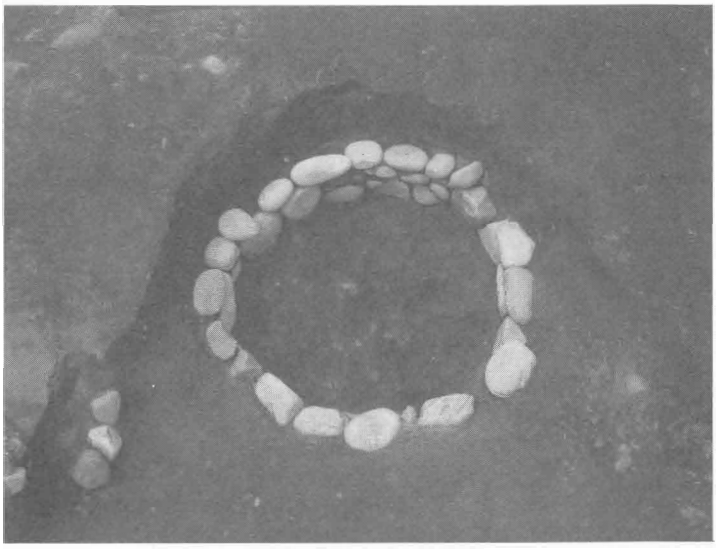


写真３　第Ⅰ面　石囲遺構

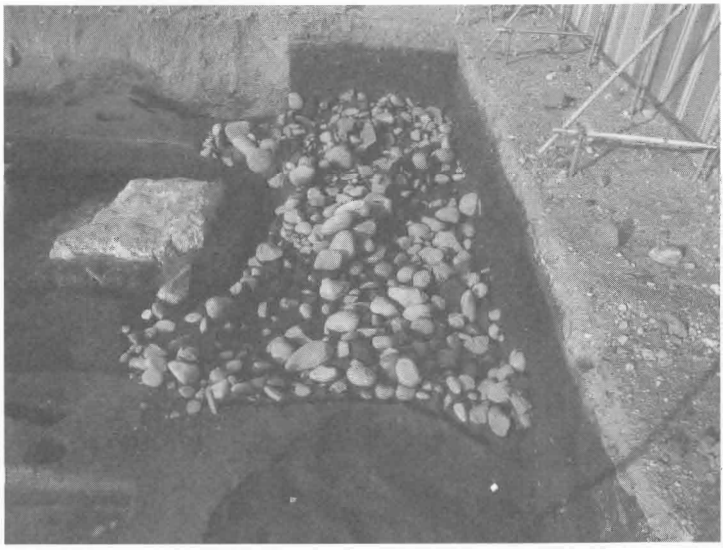


写真４　第Ⅰ面　集石址

写真５　第Ⅲ・Ⅳ面調査区全景（１）西から

写真６　第Ⅲ・Ⅳ面　調査区 全景（２）正面俯瞰

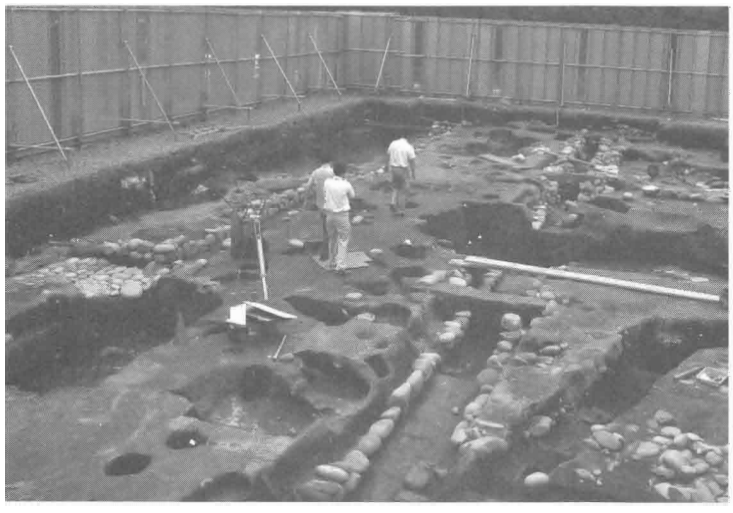


写真７ 第Ⅳ面　石積側溝付道路（１）

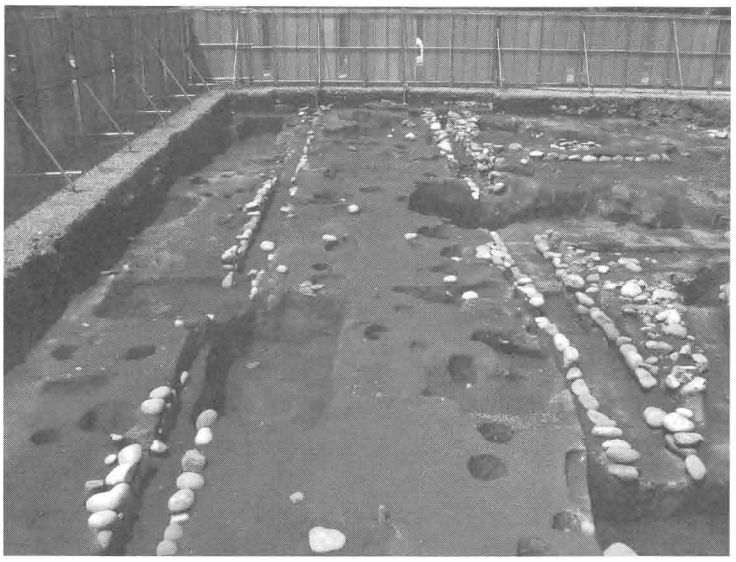


写真８　第Ⅳ面　石積側溝付道路（２）

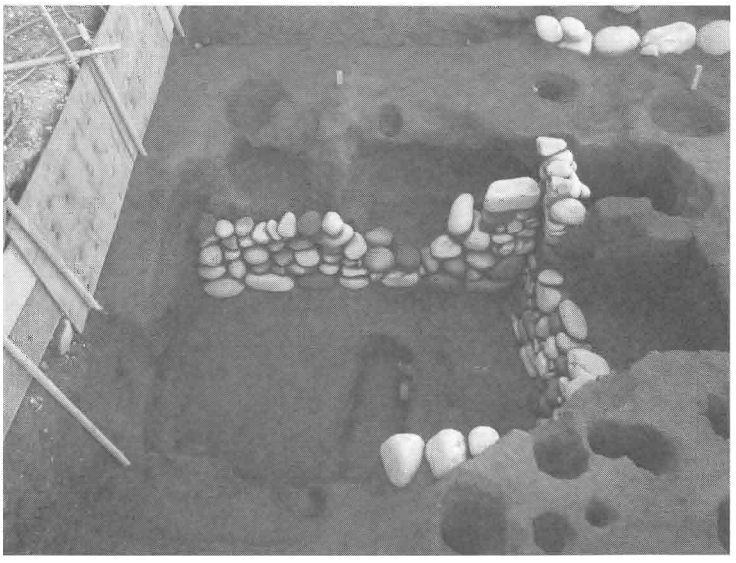


写真９　第Ⅳ面方形竪穴状遺構

写真 10　かわらけ溜まり

神奈川県考古学会刊行図書のご案内（詳細は http://www.koukokanagawa.net/をご覧下さい）

会誌 『考古論叢神奈河』

名称、発行年、頁数、非会員価格、会員価格、残部

第１集 1992.05 106頁 2,300 1,800 ×
第２集 1993.04 116頁 2,300 1,800 ○
第３集 1994.05 104頁 2,500 1,800 ◎
第４集 1995.04 99頁 2,500 1,800 ◎
第５集 1996.04 118頁 2,500 1,800 ◎
第６集 1997.04 98頁 2,500 1,800 ◎
第７集 1998.04 106頁 2,500 1,500 ◎
第８集 2000.01 132頁 2,500 1,500 ◎
第９集 2001.02 158頁 2,500 1,500 ◎
第10集 2002.04 116頁 2,500 1,500 ◎
第11集 2003.04 200頁 2,600 1,500 ◎
第12集 2004.04 172頁 2,000 － ○
第13集 2005.04 138頁 2,000 － ○
第14集 2006.03 108頁 2,000 － ◎
第15集 2007.03 94頁 2,000 － ◎

『講座 発表要旨』

名　称、開催年月日、非会員価格、会員価格、残部

講座１ 横穴墓とは何か － － ×
講座２ かながわの古代集落 － － ×
講座３ かながわの縄文文化の起源を探る － － ×
講座３ かながわの縄文文化の起源を探る２ － － ×
講座４ かながわの弥生時代の社会 － － ×
講座５ 神奈川の古墳 － － ×
講座５ 神奈川の古墳　討論成果集 － － ×
講座６ 縄文時代のムラの風景 － － ×
講座７ かながわの古代寺院 － － ×
講座７ かながわの古代寺院　研究の成果 － － ×
講座８ 相模野旧石器編年の到達点 － － ×
講座９ かながわの中世 － － ×
講座10 学史を語る 1,500 500 僅少
講座11 考古から近世・近代へのアプローチ 1,500 500 僅少
講座12 神奈川の横穴墓 1,200 400 ◎
講座13 神奈川の城館跡 1,500 500 ◎
講座14 古代遺跡再発見 1,000 500 ◎

『遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 （第１回から第14回は略）

名　称、開催年月日、非会員価格、会員価格、残部

第15回発表要旨 1991.09.29 1,300 1,000 ◎
第16回発表要旨 1992.09.27 1,300 1,000 ◎
第17回発表要旨 1993.09.19 1,300 1,000 ◎
第18回発表要旨 1994.09.25 1,500 1,200 ◎
第19回発表要旨 1995.09.23 1,500 1,200 ◎
第20回発表要旨 1996.09.23 － － ×
第21回発表要旨 1997.09.14 1,000 500 僅少
第22回発表要旨 1998.11.15 1,000 700 ◎
第23回発表要旨 2000 09.12 － － ×
第24回発表要旨 2000.10.01 1,500 800 僅少
第25回発表要旨 2001.10.13 － － ×
第26回発表要旨 2002.11.24 1,000 500 ◎
第27回発表要旨 2003.10.19 1,200 300 僅少
第28回発表要旨 2004.10.03 1,300 300 僅少
第29回発表要旨 2005.10.23 1,200 200 ◎
第30回発表要旨 2006.11.19 1,500 500 ◎

厚木市　小野公所（おのぐじょ）遺跡第３地点・Ａ地区

―玉川上流域における後期古墳関連遺構の調査―

林原（はやしばら）　利明（としあき）

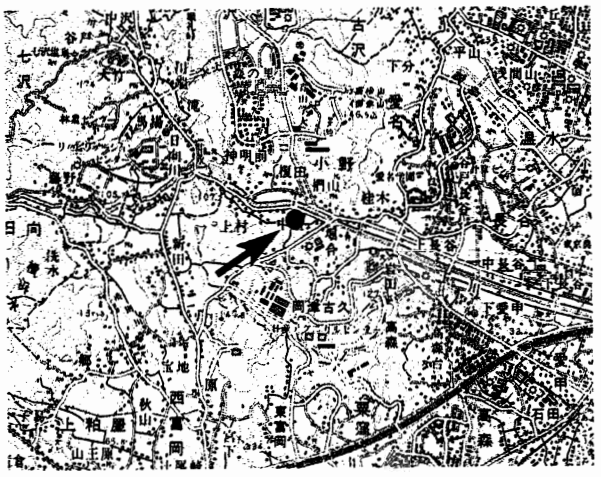
所 在 地　厚木市小野734-２
社会福祉法人清琉会　玉川グリーンホーム内
調査機関　西相文化財研究所
調査担当　林原利明
調査原因　道路拡幅工事に伴う事前調査
調査期間　2006年６月22日～７月14日
調査面積　30㎡

１．遺跡の立地

小野公所（おのぐじょ）遺跡（厚木市No.118・125遺跡）は、神奈川県中央部を南流する相模川中流域の西岸部に位置する厚木市の南西部、伊勢原市との市境に近い玉川上流域南岸の沖積地を見下ろす段丘上に位置する。今回の調査地区は、遺跡の北東端付近の標高48m前後の段丘上に所在する（第１図）。

周辺には、台地や丘陵上を主に旧石器時代から近世までの各時代の遺跡が確認されており、なかでも今回の調査地区付近から玉川のより上流域にあたる伊勢原市日向地区にかけては、多くの後期を主体とする古墳が現存している。今回の調査地区周辺にも「島残（しまのこし）古墳群」として数基の古墳が現在でも残っている。ただし、調査例は１基のみで（七沢地区21号墳。６世紀末～７世紀前半代）、古墳群の詳細はよくわかっていない。

小野公所遺跡ではこれまでに２回の調査がおこなわれ、平安時代の集落跡とともに縄文時代と中世の遺構・遺物が検出されている。



第１図　調査地区位置図（1/50,000）

２．調査に至る経緯と経過

今回の調査は、老人福祉施設増築計画にともなう道路拡幅部分約40㎡を対象としたもので、調査地区の南側には、七沢地区24号墳（『厚木の古墳』1998）として周知されている南北約８m、東西約５m、高さ約0.8mの規模をもつ墳丘が隣接して現存している。

なお、今回の調査と並行して、厚木市教育委員会で南隣接地の浄化槽埋設部分（約55㎡）の調査をおこなっていることから、今回報告する調査地区を小野公所遺跡第３地点・Ａ地区、厚木市教育委員会調査地区を同Ｂ地区として区別した（第２図）。

また、調査に際して、幅が狭く、調査深度との関係から、安全上、調査ができない部分が生じ、調査区は３区に分割された状態となったため、便宜的に東からa～c区と呼称した（第２図）。最終的な調査範囲は約30㎡である。

３．調査の概要

今回の調査では、調査地区全体にわたり七沢地区24号墳に関連するものと考えられる遺構･遺物とその他の遺構・遺物が検出された。検出された遺構と遺物は以下のとおりである。

（１）遺　構

古墳時代（七沢地区24号墳関連遺構）：

集石遺構　1

濠状遺構　1

古墳時代以降：　ピット　3

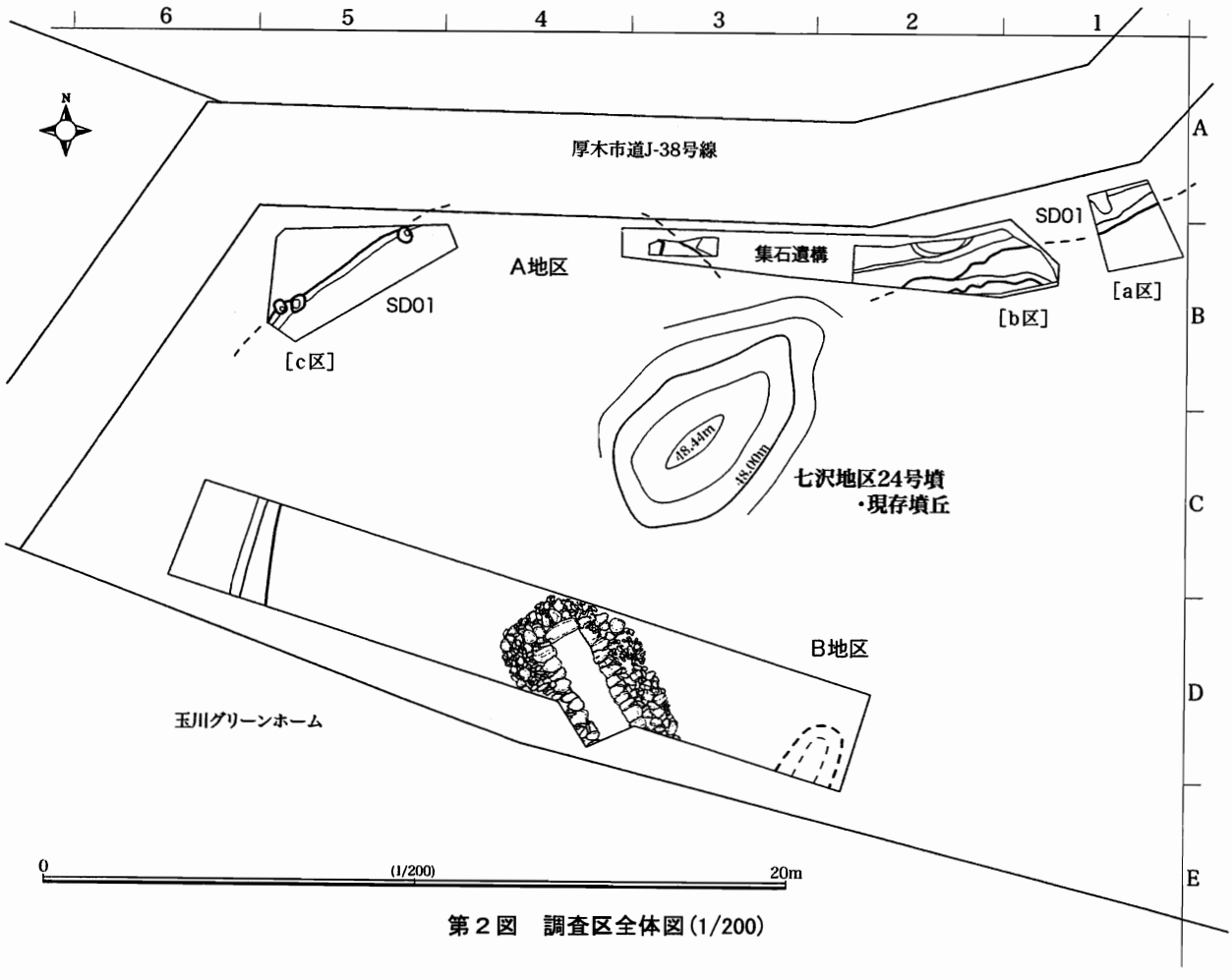
以下に、検出された遺構について説明する。

七沢地区24号墳関連遺構

集石遺構（第２・３図）　a・b区のみで検出され、全容は調査区域外へ展開するために不明である。七沢地区24号墳の墳丘構築材として用いられた礫が流出したとも考えられる遺構である。

検出部分では、濠状遺構（SD01）の掘り込みを覆うように大小河原石が集積しており、集積礫上面は南（墳丘側）から北への傾斜がみられる。礫は表土直下からみられ、b区西側ではSD01の掘り込み内までほぼ隙間ない状況で礫が積み重なっているが、東側ほど礫の分布は薄くなる。構成礫としては、拳大弱～長軸50・ぐらいまでの多様な礫がみられ、おおむね上部に小形礫、下部に大形礫が分布する傾向がみられるが、それらは人為的に積み上げた（組んだ）とは積極的には考えられない状況である。

濠状遺構（SD01．第２～４図）　調査したすべての区画で検出され、各区画とも部分的な検出だが､展開状況や形状から同一のものと考えている。



第２図　調査区全体図(1/200)

七沢地区 24 号墳の周濠の可能性がある遺構である。

全容は不明だが、検出部分での展開状況は、 c 区～b 区西側では現存墳丘を囲むように弧状をなして展開するものと考えられるが、b 区東側～a 区にかけては北側の道路（厚木市道 J-38 号線）にほぼ平行するように直線的に展開している。断面形状はおおむね逆台形をなす。

検出部分での規模は、もっとも検出状況の良好な c 区で幅 1.2m 以上、深さ 65～85 cm、立ち上がりの傾斜角度は 50～70° 前後である。底面は、ハードローム層中に構築され、凹凸はあるが、ほぼ水平である。b 区では東側で南側肩部と底面の一部が検出され、幅 1.1 以上、深さ 1.2m（最大）、立ち上がりの傾斜角度は 70° 前後である。底面は、ハードローム中層に構築され、凹凸はあるが、ほぼ水平である。a 区では南側肩部は検出されているが、底面は検出されていない。

その他の遺構

ピット c 区内の SD01 の肩部付近を SD01 を掘り込む状態で、SD01 とは覆土の状態が明らかに異なる長径 35～50 cm、短径 30～40 cm、深さ 95 cm前後の平面楕円形・隅丸長方形のピットが 3 個検出されている。出土遺物はないが、重複関係から古墳時代以降のものと考えられる。

（2）遺　物

検出された遺構および表土中から以下の遺物が出土しているが、いずれも破片で、量も少ない。

土器・陶器：縄文土器（縄文時代）
　　土師器・須恵器（古墳時代以降）
金属遺物：刀子・鉄滓（古墳時代以降）
　　煙管（近世）

4．まとめ

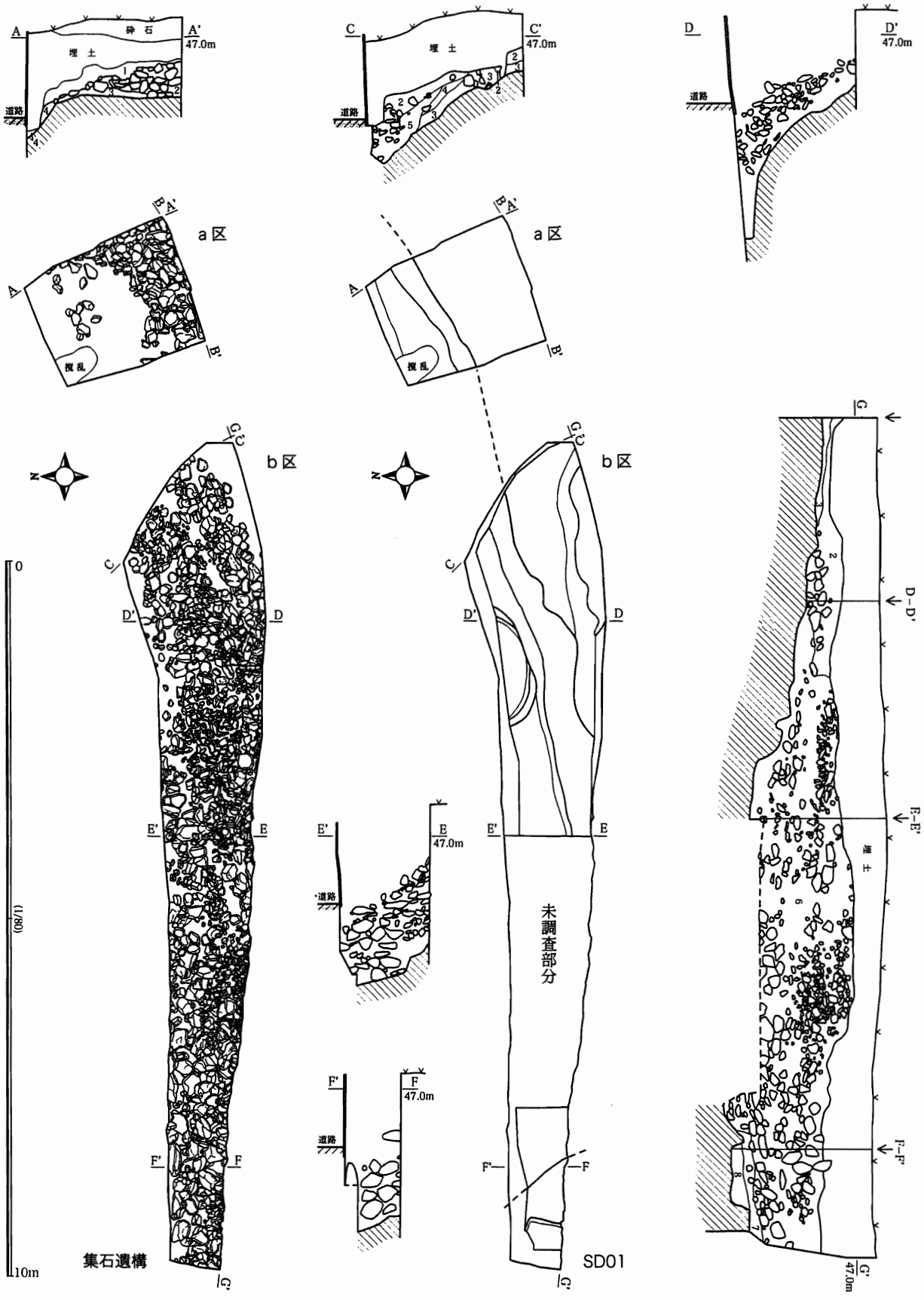
今回の調査地区は、限られた範囲のものであったが、隣接する七沢地区 24 号墳に関連すると考えられる遺構が検出され、これまで詳細不明であった同古墳について不確定要素は残るものの貴重なデータを得ることができた。

検出された遺構のうち、古墳関連遺構と考えられるものは集石遺構と濠状遺構（SD01）である。集石遺構は、前述のように、七沢地区 24 号墳の墳丘構築材として用いられた礫が流出したものの可能性もあるもので、礫の分布が古墳北側の a・b 区のみにみられ、西側の c 区および、南側のＢ地区ではみられないことなどに、検討は必要だが、検出部分では SD01 内を充填するような状況であることから、SD01 との関係を無視することはできない遺構である。

a～c 区で検出された濠状遺構（SD01）とした落ち込みは、いずれも片肩部のみの検出であるなど、全容は不明であるが、その掘り方・展開状況・覆土の状況や出土遺物から七沢地区 24 号墳の周濠の可能性があるものと判断した。

以上のように、今回の調査では七沢地区 24 号墳との関連が伺われる遺構が検出され、調査所見を述べたが、いずれも一部のみの検出で、両遺構の全容が不明であるために、展開状況・時期・性格の詳細については、十分に評価できたとはいえない。

また、墳丘の南側で並行して調査がおこなわれたＢ地区では、未盗掘と考えられる自然石積横穴式石室の一部および周濠と考えられる遺構が検出されており、いずれも七沢地区 24 号墳に関連する遺構と考えられるとともに、周濠と考えられる遺構は、その展開状況からＡ地区検出の SD01 とは同一のものと考えて差し支えない状況である。また、石室の検出部分での規模は、長さ 3 m 以上、幅 0.8m 前後と形状とともに周辺でこれまでに調査された後期古墳と大差ないものである。石室内からは、土師器・須恵器の土器類とともに、直刀・銅鏃・



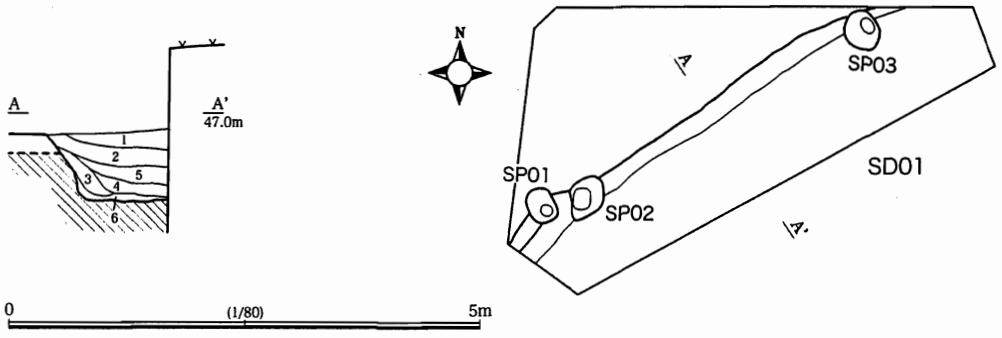
第３図　ａ・ｂ区全体図(1/80)

銅釧・馬具(轡、辻金具)、玉類(勾玉、ガラス小玉)が出土しており、それらの様相はおおむね6世紀末から7世紀前半ごろの年代を示しているという。

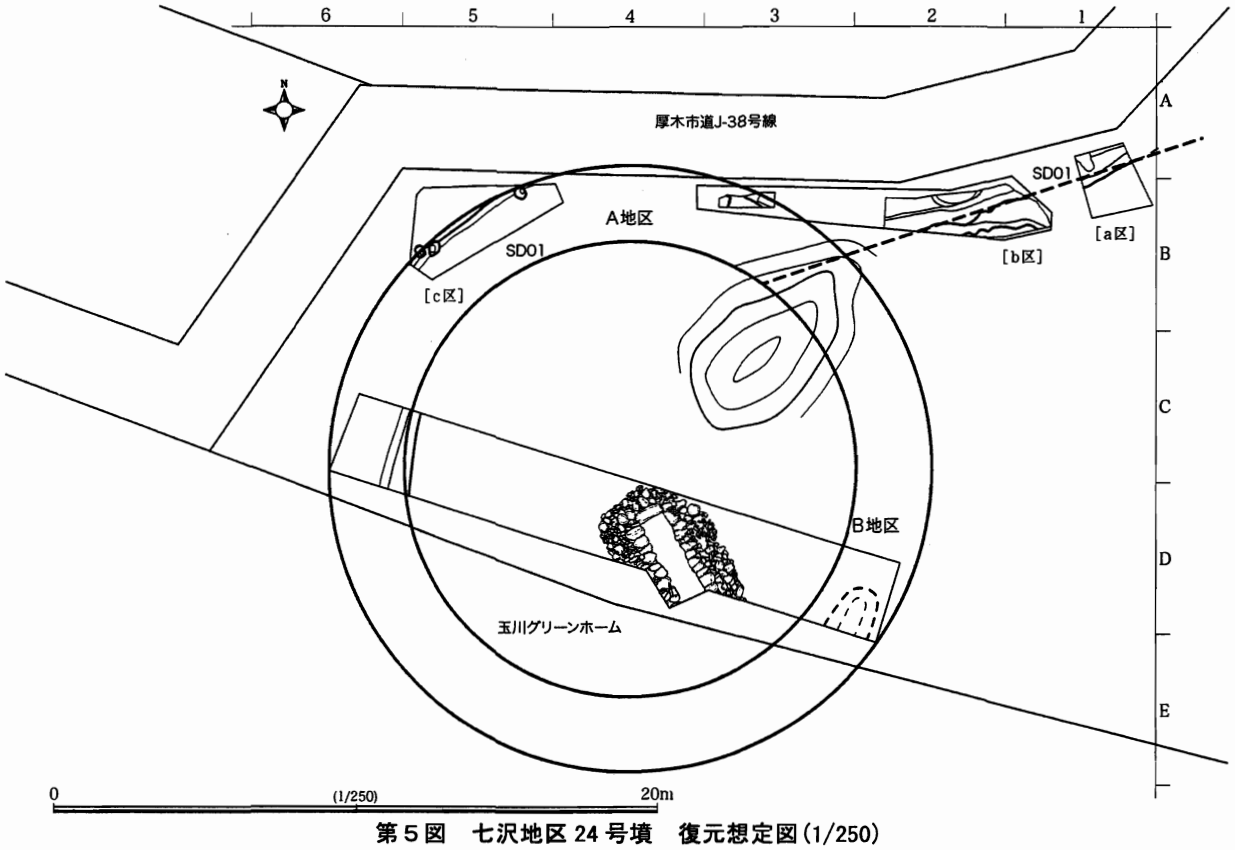
第5図には、今回のA・B両地区の成果を踏まえて、円墳としての規模を復元してみた。内径15m、周濠もふくめた外径で20mくらいに復元でき、この規模も周辺の後期古墳と類似するものである。ただし、A地区 a 区および b 区東側の濠状遺構（SD01）の展開状況は円墳と考えたばあいには不整合がみられることから（第5図の破線部分）、円墳以外の墳形あるいは、複数の古墳の存在の可能性等を考慮する必要もある。

いずれにしても、今回の調査のみでは、七沢地区 24 号墳および検出遺構についての評価は十分ではないため、今後の周辺での比較データの蓄積を待って、改めて評価したいと思う。

なお、B地区の調査成果については、厚木市教育委員会から整理中にもかかわらず、内容・図面等の提供を受け、その情報を今回の報告に反映させていただいた。ご厚意にお礼申し上げます。



第4図　c区全体図(1/80)



第5図　七沢地区24号墳　復元想定図(1/250)

写真１　調査地区近景（北西から）

写真２　七沢地区24号墳の現況（南から）

写真３　b区・集石遺構（東から）

写真４　b区・集石遺構（北西から）

写真５　b区・SD01（集石排除後．西から）

写真６　b区・集石遺構/礫堆積状況（北東から）

写真７　c区・SD01（南西から）

写真８　B地区・石室/遺物出土状況（北東から）

高座郡寒川町　岡田西河内遺跡（おかだにしこうち）

—岡田古墳群の調査—

小林（こばやし）　克利（かつとし）

所 在 地　第３次調査：寒川町岡田 96-1
第４次調査：寒川町岡田 90-14 外

調査機関　吾妻考古学研究所

調査担当　小林克利

調査原因　土地区画整理事業

調査期間　第３次調査：平成 18 年１月 16 日～３月 31 日、第４次調査：平成 18 年７月 13 日～平成 19 年９月 12 日

調査面積　第３次調査：約 310 ㎡
第４次調査：約 2,500 ㎡

第１図　調査地位置図(1/25,000)

１．遺跡の立地

岡田西河内遺跡(寒川町　No.68)は町域の中央部に位置しており、北東側から貼り出す舌状台地南西端に立地する。南側は目久尻川と小出川に挟まれた氾濫平野となっており、遺跡の標高は台地裾部で 10m前後、上部で 15m前後を測る。周辺には５世紀代の前方後円墳である大(応)神塚古墳(寒川町　No.8)や、その周囲に展開していたとされる古墳時代後期の円墳群がある。

２．調査に至る経緯と調査経過

本遺跡の発掘調査は、寒川駅北口地区土地区画整理事業に伴うものである。本遺跡はこの事業区域の北端部に相当しており、遺跡範囲全てが事業地に含まれることから、寒川町教育委員会による埋蔵文化財の有無と遺跡範囲の確認を目的とする試掘調査を経て、平成 17 年に第１～２次調査が実施されている。今回の調査は、寒川町建設部・寒川駅周辺整備事務所の委託を受けた有限会社吾妻考古学研究所が平成 17 年度から調査を実施しており、現在も継続中である。

３．調査の概要

[第３次調査]

第３次調査区域内では昭和 47 年に高塚古墳の石室が発見され、翌昭和 48 年に寒川郷土会（臼井彦太郎・三留甚太郎）によって発掘調査が実施されている。当時の記録によれば、既に盗掘・破壊されており、石室石材は一部が遺存するのみであったらしい。第３次調査では弥生時代の土坑１基、住居跡９軒、ピット４基、前述した古墳時代の高塚古墳（周溝・石室）、近世以降の溝状遺構４条が検出された。住居跡９軒の内の２軒(２・９号住居跡)は弥生時代中期、５号住居跡は弥生時代後期の特徴を持つ土器群を出土している。溝状遺構は、１・２・５・６号溝状遺構が近世以降の所産と推測され、１号溝状遺構は覆土最上層に富士火山灰が堆積している。３・４・７号溝状遺構は、深さ 10～15 ㎝前後、幅約 1.5m を測り、覆土は黒褐色

土を主体にして５～８㎜前後の黒色火山灰粒子を多く含んでいる。覆土からみて古墳時代に掘られたものと考えられる。断片的な検出ではあるが、これらをつなぎ合わせると、内径20m前後の円墳周溝が想定できる。

石室は、これら周溝で囲われた想定墳丘の中央部の地山を掘り込んで構築されており、南東方向に開口している。墳丘盛り土は後世の削平により消失し、天井部は遺存していないが、調査区域内では玄室から羨道部までを確認している。石室内部は、昭和48年の調査記録にあるように、後世の盗掘による破壊が著しく、石室の切石は左側壁の６点と左側壁南側の１点、石室中央付近に縦列する２点が検出されているのみであった。石室の掘り方は、最大幅約 3.6m、長さ約 5.5mを測り、平面形は無花果状あるいは馬蹄形状を呈する。覆土は径５㎝以下の小礫と黒色土の互層となっており、切石の裏側及び下側には径５㎝以下の小礫が充填されていた。検出時に確認された多量の小礫はこれらの「裏込め石」だけが残されたものと推測される。

石室の規模・形状等は不明であるが、中央部の縦列する２点を中央部と捉えた場合の幅は約 1.2m、左側壁南側の１点を左袖部と考えれば、長さ４m弱の規模が想定できる。推定左袖部の切石は後世の盗掘により大部分を破壊されているが、羨道部を挟んだ東側には石の抜き跡と思われる浅い窪みが認められており、この浅い窪みと推定左袖の間には地山とは明瞭に色調の異なる明褐色土を検出している。遺物は径２㎝前後を測る耳環１点が石室内から出土している。

［第４次調査］

第４次調査では弥生時代の住居跡８軒・方形周溝墓２基・溝状遺構２条、古墳時代の高塚古墳（周溝・石室）、中世以降の堀立柱建物跡１棟・土坑７基・溝状遺構３条・道路状遺構１条・井戸跡４基等が調査され、弥生時代～古墳時代の土器・土製品・石器・鉄製品・ガラス製品、中世以降の土器・銭貨等が出土している。第４次調査は概ね着手順でＡ区～Ｈ区まで調査区名を便宜的に振り分け、調査を実施した。高塚古墳石室と周溝はＧ区で検出されている。

Ｇ区は大(応)神塚古墳の周囲に展開していたとされる古墳時代後期の円墳推定地の寒川町№９遺跡に相当する。台地中位面に立地しており、北東側から南西に向かう尾根上の西向き緩斜面に位置する。東側には第３次調査区がある。Ｇ区で調査された高塚古墳は、明治41年に東京帝国大学の坪井正五郎によって石室の発掘調査が行われており、横穴式石室と数体分の人骨が検出されている。遺物は金環・直刀・鉄族・切子玉・勾玉・管玉等が出土している。

今回の調査では、墳丘こそ確認できなかったものの、高塚古墳のほぼ全容を検出することが出来た。周溝の幅は最大約4.6m、深さ最大約1.5mを測り、形状は内径約20mの規模で円形を呈している。石室は表土層直下で検出され、内部は拳大以下の多量の小礫と破壊された石室石材の多量の混入が確認された。第３次調査区で確認された石室と同じように、墳丘中央部の地山を掘り込んで構築され、南東方向に開口している。

石室検出時の遺存状態は良好とは言い難く、天井部・奥壁部・羨道部左側壁南側部分は遺存しておらず、玄室は一部が破壊されていたが、石室自体の遺存状態は比較的良好なものであった。全長は推定で7.5m、玄室長は3.3m前後、玄室幅は中央付近で約２m、羨道幅は約 1.3mを測る。現存高は、奥壁付近で最大 1.2mを測る。床面は玄室の一部と羨道の北側に径 10 ㎝前後の円礫の敷設が認められ、玄室の床面には凝灰岩の削り屑が15㎝ほどの厚さで硬く突き固められていた。玄門部の床面には幅約50㎝、長さ80㎝程の切石１点が

框石として置かれていた。長軸の中央部分で羨道側に５㎝ほどの段差を持っており、羨道側の低い段まで円礫が充填されていた。羨門部について特定することは出来ないが、羨道部左側壁の南端の床面がロームを貼った硬化面となっており、この南側に径 50 ㎝前後の凝灰岩３点が出土している。

平面形は玄室が若干胴張り気味の方形、羨道は長方形を呈する。側壁は凝灰岩の切石で構成されているが、玄室側壁の石材は一辺の長さが 60 ㎝以上の石材を２～３段に積んで、丁寧に整形しているのに比して、羨道の側壁は一辺が 60 ㎝以下の殆ど未調整といってよい石材を、多い部分では４段以上積み上げている。明治期の調査では玄室の高さ約 1.5mとされているので、更に一段積み上げていたかもしれない。

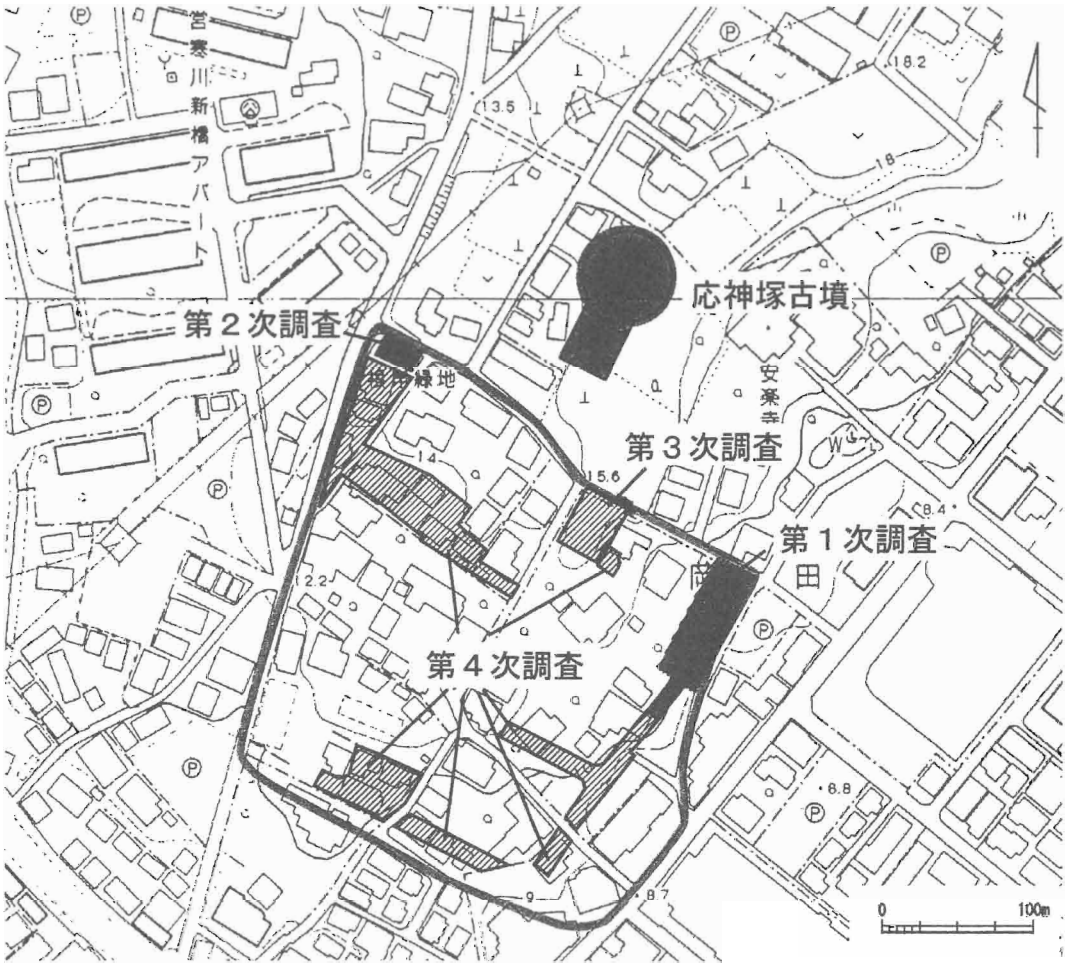
立面形は玄室が若干内傾する台形状を呈し、羨道は台形状を呈するように、一段ずつ内側に持ち送っている。羨門付近から周溝にかけては２枚以上の硬化面が帯状に重層して検出されており、最も古いと考えられる硬化面上の周溝側からは須恵器甕の胴部片と径 10 ㎝前後の河原石がまとまって検出されている。硬化面は、追葬するための墓道として何度か使用された痕跡と考えられ、須恵器甕と河原石は墓前祭祀等の葬送儀礼の跡が推測されよう。

石室の掘り方は、最大幅約 5.8m、長さ約 8.5mを測り、平面形は隅円方形を呈する。石室周辺部は一段低く掘り込まれており、框石両脇の立柱石の掘り方には「根石」が認められている。

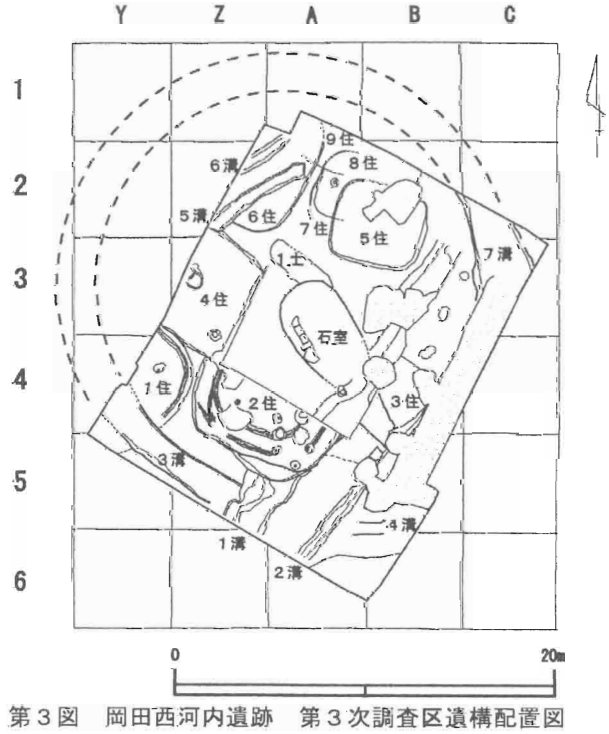
覆土は黒色土とロームを互層にして版築状に突き固められており、部分的に凝灰岩の削り屑の層が認められた。石室からの出土遺物は鉄鏃片１点とガラス小玉１点、人の歯骨の一部にとどまったが、周溝内からは須恵器甕、短頸壺等が出土している。

３．まとめ

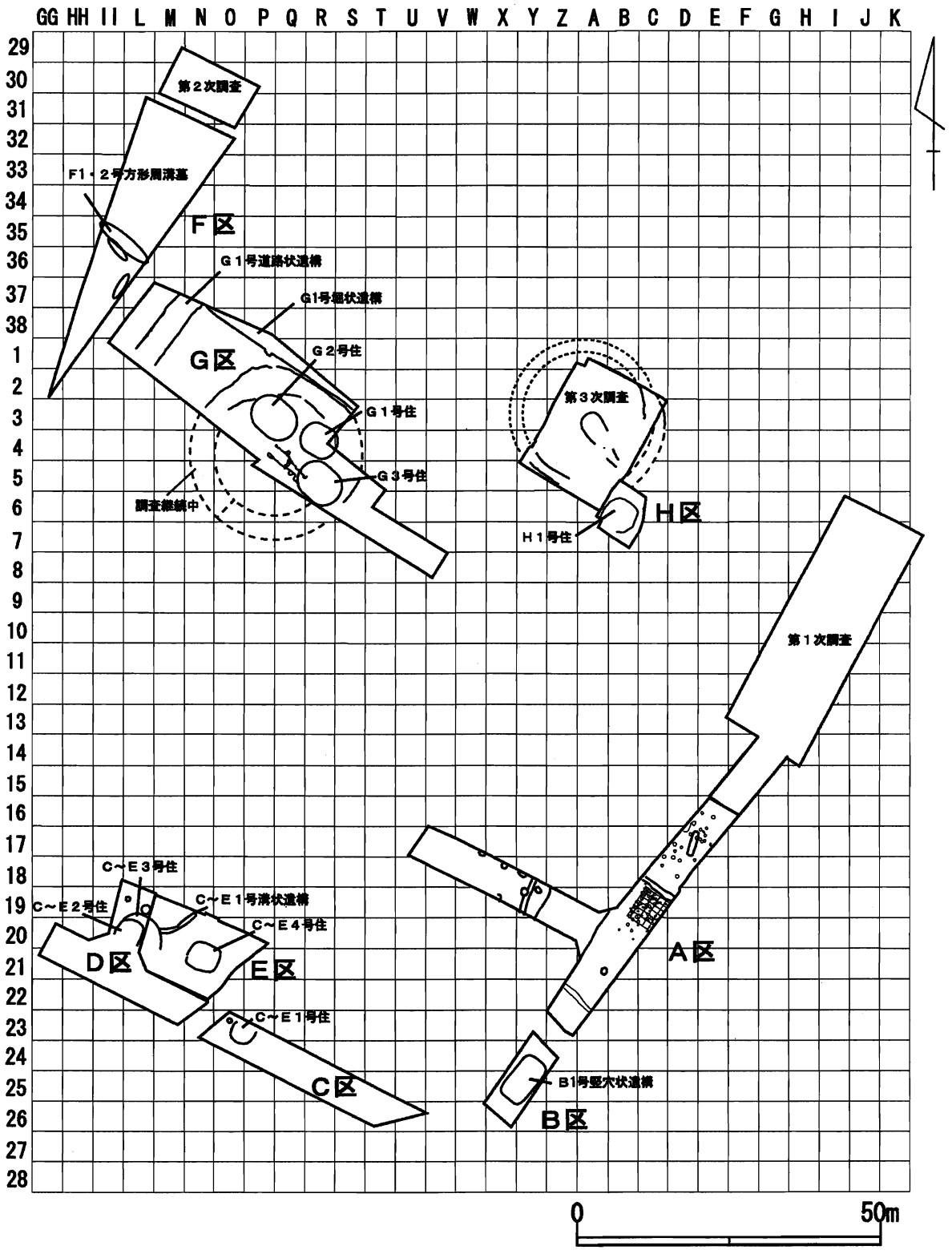
今回の調査で検出された２基の石室は、両方とも凝灰岩切り石積みの横穴式石室であり、石室の形態や出土遺物の様相等から第３次調査区の石室が７世紀中頃、第４次調査区の石室が７世紀初頭頃と推測される。切り石積み横穴式石室は、神奈川県西部地域では殆ど確認されておらず、貴重な発見といえよう。これまで、切り石積み横穴式石室は、神奈川県内では川崎・横浜市域を中心とする多摩川・鶴見川流域に多く認められており、相模川流域での発見例は県指定史跡である大磯町釜口古墳等、数例に過ぎない状況であった。川崎市内では古墳時代前期から後期にかけて数多くの高塚古墳が造営されており、７～８世紀にかけては影向寺跡や橘樹郡衙が創建・造営されているが、本遺跡周辺でも古代高座郡衙とされる茅ヶ崎市西方Ａ遺跡や、古代寺院に推定されている七堂伽藍跡遺跡等が調査されている。大(応)神塚古墳とその周辺の古墳被葬者の消長と系譜を考える上では興味深い共通点である。今後はこのような周辺地域の考古学的環境を踏まえたうえで、更に検討を加えていきたい。



第２図　岡田西河内遺跡　調査区位置図



第３図　岡田西河内遺跡　第３次調査区遺構配置図



第４図　岡田西河内遺跡　第４次調査区遺構配置図

写真１　第３次調査区　石室（東側より）

写真２　第４次調査区　古墳全景（北側より）

写真３　第４次調査区　石室（北より）

横浜市　（仮称）元町水屋敷遺跡

―近代の埋設管確認調査―

青木 祐介・鈴木 重信

所 在 地　横浜市中区元町一丁目 77 ほか

調査機関　（財）横浜市ふるさと歴史財団

調査担当　青木祐介（横浜都市発展記念館）
鈴木重信（埋蔵文化財センター）

調査原因　水屋敷通りと通称される街路の再整備を契機とする。整備に伴う工事は、埋設管に影響を与えるものではないところから、学術目的の確認調査として実施した。実施にあたっては、有限会社ユー・エス・シー　街・空間計画および横浜市等の協力を得た。

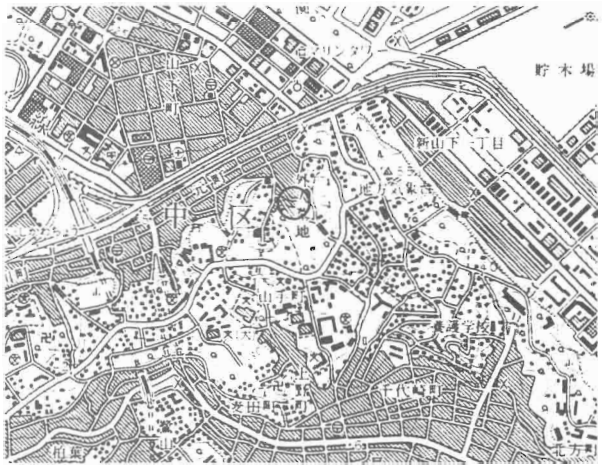
調査期間　平成 17 年度：平成 17 年７月 27・28 日、平成 18 年度：平成 19 年２月５・６日

調査面積　平成 17 年度：10.6 ㎡
平成 18 年度：８㎡

１．遺跡の立地

横浜市域のほぼ中央東端部付近には、標高 50m 前後の「山手の丘」が連なる。頂部の平坦面は広いとは言えないが、地形面区分では下末吉台地に属している。周囲は樹枝状に開析されており、調査地は北西に開口する一支谷内に位置している。標高は、およそ５m である。絶対位置は、北緯 35° 26′ 20″、東経 139° 39′ 04″ を測り、みなとみらい線元町・中華街駅の南約 250m にあたる。北東隣接地には外国人墓地があり、その北側には元町貝塚が存在する。また、調査地南側の谷頭部は、「元町公園」となっている。

山手地区は、慶応３年（1867）に居留地として開放される。外国人は競売によりその借地権を手に入れる。山下居留地から移り住む者も多く、住宅地区としての発展を見ることになる。その一方谷戸部には、工場が営まれるようになる。ここに紹介する調査地も、明治時代の早い時期に仏人アルフレッド・ジェラールが瓦や煉瓦などの製造工場を営んでいた敷地が含まれている。



第１図　調査位置図（1/25,000）

第２図　ジェラールの工場外観

門を入った左手が「下部貯水槽」の位置に相当すると推定される。外壁には工場名が見える。（神奈川県立博物館 1982『横浜銅版畫』有隣堂所収『日本繪商人録』1886 より）

２．調査に至る経緯と調査経過

アルフレッド・ジェラールは、船舶への飲料水供給事業も行っていた。このため、地元では彼の施設を「水屋敷」と呼び、その前面の通りを「水屋敷通り」と通称していた。船舶へ飲料水を供給するため、万延元年（1860）に開削された堀川まで送水管が敷設されていたと伝えられている。２回の調査は、連続性のある計画の下に実施されたものではない。

平成17年度の調査は、商店街振興組合元町クラフトマンシップ・ストリートが実施する「ライブタウン整備事業」に伴い、地域における近代産業遺構の活用をはかるため、ジェラールが敷設した送水管確認調査の企画に協力したものである。平成18年度の調査は、横浜市環境創造局が実施する元町公園入口付近の再整備を契機とし、横浜都市発展記念館の調査研究事業として実施した。

いずれの調査とも、整備工事の実施時期に合わせて２日間という短期間で実施した。

３．調査の概要

平成17年度の調査区（T）は算用数字、平成18年度の調査区はアルファベット大文字を付して区別することとした（第３図）。１TとCTは、あえて重複して設定した。平成17年度の調査において路線図に記載のない埋設管が検出され、掘削を中断した。平成18年度の調査においていわゆる「埋め殺し管」であることを確認した上、当該地点の再調査を試みたものである。

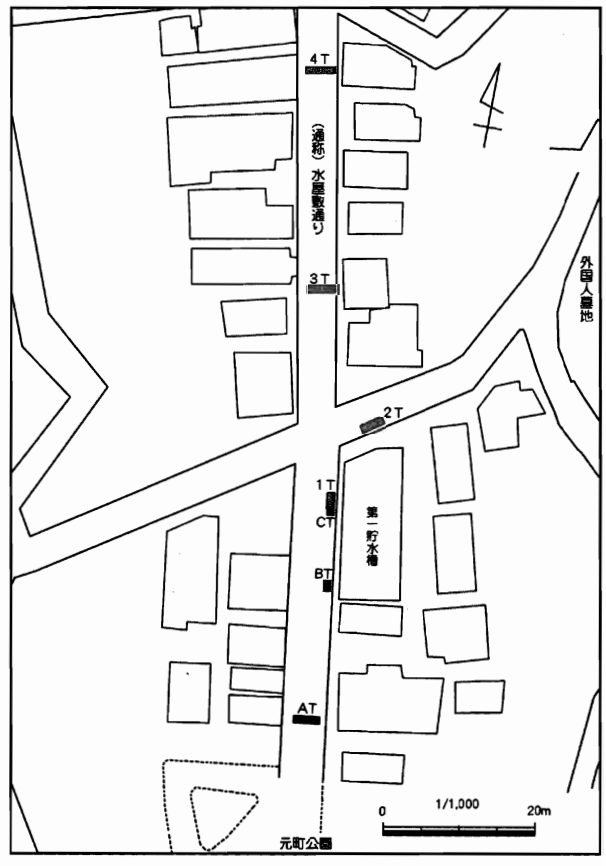
１T・２T・BT・CTの４区は、第１貯水槽（下部貯水槽）周辺の状況を確認するために設定した。３T・４Tは水屋敷通りの埋設管を確認するため、道路と直交して設定した。また、ATは上部貯水槽（第２貯水槽）と下部貯水槽の間にある「中間桝」から下部貯水槽に続く管路を確認するために設定した調査区である。

各調査区の概要は第１表にまとめた。以下、「第１貯水槽」周辺部の調査結果を中心に略記する。

（１）「第１貯水槽」周辺部の調査結果

第１貯水槽北辺中央の内壁面には、アーチ内に窪みがあり、２本のバルブ付き鉄管が存在する。また、貯水槽の底面西壁に沿って、大部分がコンクリートに覆われた一対の鉄管が存在し、西壁の途中から入り、途中で外に出ている。このことから、第１貯水槽とは本来関係なく、上部貯水槽からの送水管と推定され、先行して敷設されていたものと考えられている。ただし、これまでのところ第１貯水槽が築造された年代は明らかにされていない。１T・２T・BT・CTの設定は、第１貯水槽に関する以上の情報に基づいている。

２T（第４図）では現路面下約70cmで、素焼きストライプ土管列が検出された。調査区北側に寄り、現道に沿って存在する。５点検出され、外国



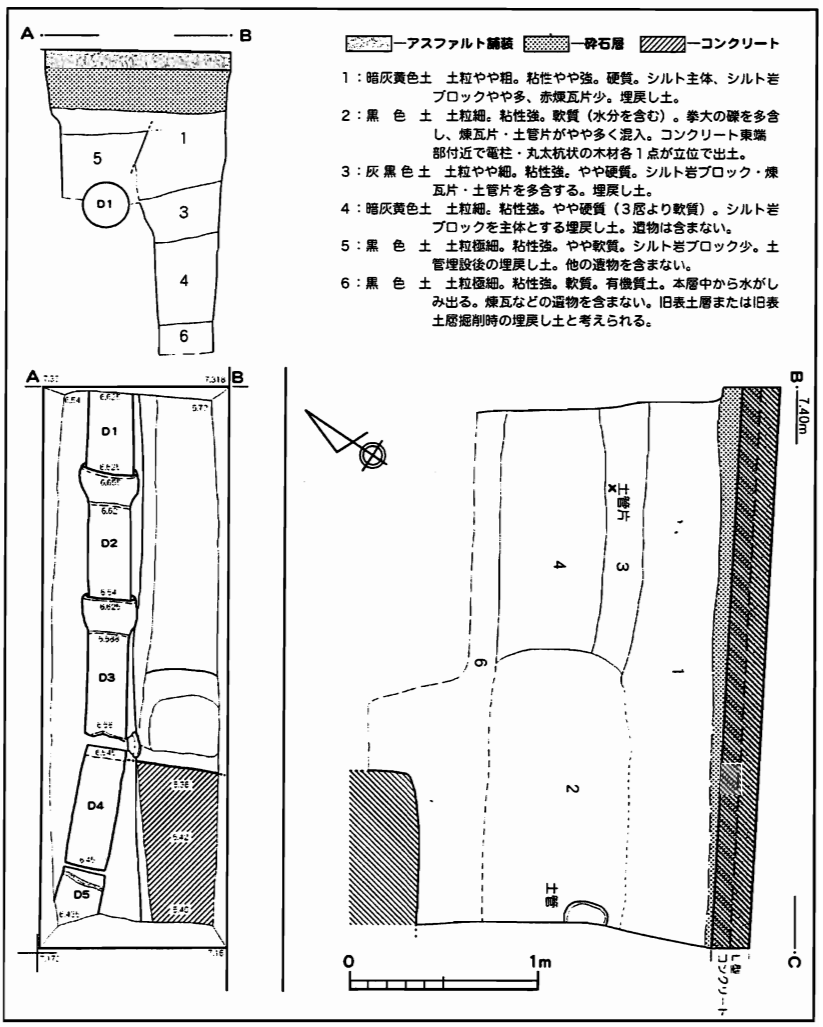
第３図　調査区位置図

第１表　各調査区の概要

調査区	規模（m）	面積（㎡）	掘削深度（m）	所　　見
１Ｔ	１×２	2	0.5～0.6	深さ約0.5mで２本の鉄管を検出。道路中央側はガス管、貯水槽側は水道管とみられる。水道管より貯水槽側はＬ型側溝敷設時のものとみられる撹乱があり、煉瓦片・コンクリートブロック等が混入する。
２Ｔ	１×３	3	0.8～1.9	道路中央側で土管列を検出。調査区南西隅部、路面下1.8mでコンクリートを確認。位置関係から貯水槽内の一対のバルブに連なる鉄管に関係するものとみられる。
３Ｔ	0.8×3.3	2.64	0.4～1.5	調査区西側の下水管の東側に近接し、路面下1.35mでコールタールでコーティングされた金属管を検出。この付近をボーリング探査したが、手ごたえなし。
４Ｔ	0.8×3.7	2.96	0.7～1.5	水道管と下水管の間の路面下約1.2mで道路の走行方向に２本の木材が検出された。断面の観察結果から、東側のものは一辺16cmの断面箱形を呈する木管と判断されたが、西側のものについては確認できなかった。この周辺のボーリング探査したが、手ごたえなし。トレンチ底面から-40cm程で硬質な土層となる。地山？
Ａ Ｔ	１×3.5	3.5	0.4～1.5	調査区中央やや東側の路面下約65cmで北東―南西方向に長軸を有する「煉瓦囲い集石」を検出。路面下約80cmには焼土面が存在し、その直上、「煉瓦囲い集石」との間にはＩ型を主体とするジェラール瓦が集中出土。「煉瓦囲い集石」東側、路面下約１ｍには南北方向の陶製土管列が検出された。筒部外径は約28cmをはかる。
Ｂ Ｔ	１×1.5	1.5	0.8～1.05	調査区ほぼ中央部、路面下約75cmで南北方向の陶製土管列を検出。調査区北端で素焼き方形ストライプ土管に接続する。接続部の隙間には２個の煉瓦が詰められており、うち１個体は有孔煉瓦であった。陶製土管列の破損部をより大形の陶製土管片が覆っていた。陶製土管筒部外径は約22cmをはかる。
Ｃ Ｔ	１×3.0	3.0	0.65～0.9	調査区南東隅部、路面下約75cmで素焼ストライプ土管列が検出された。１Ｔで確認されていた旧水道管とガス管水道管を切断撤去後、掘削を続行したところ調査区北西隅部付近で土管列の続きを確認した。中央部は旧水道管とガス管の敷設時に破壊されていた。調査区中央西壁、路面下約60cmで東西方向の無文素焼土管が検出された。路面下約40cmのレベルで層厚10～15cmの焼土層があり、ストライプ土管列がこの焼土層下に位置するのに対して、無文素焼土管は焼土層を切って敷設されている。両者は新旧関係にあり、ストライプ土管列が旧いと判断された。なお、旧水道管のジョイント部には「横水昭和四年８９６」の銘が認められた。

人墓地側が高く、水屋敷通り側が低い。受部は、いずれも外国人墓地側に向けられていた。Ｄ４およびＤ５は受部を欠き、Ｄ４で屈曲している。サンプルとしてＤ３とＤ４を採り上げた。これらには、強い規格性が認められる。全長72.5cm、筒部長63cm、受部端部外径 30cm、筒部外径24cm、同内径19cm程を測り、Ｄ３の重量は約19kgである。筒部の成形は、31.5cmの長さの円筒を作出し、これを接合する点で共通している（写真５）。

土管列を避け、貯水槽側を掘り下げたところ、調査区南西端部でコンクリートが検出された。上端で現路面下約1.8mを測る。十分な観察ができず、鉄管の存在等については確認できなかった。土管列側の土層断面は、コンクリートの東端部とＤ４東端



第４図　２Ｔ概略図

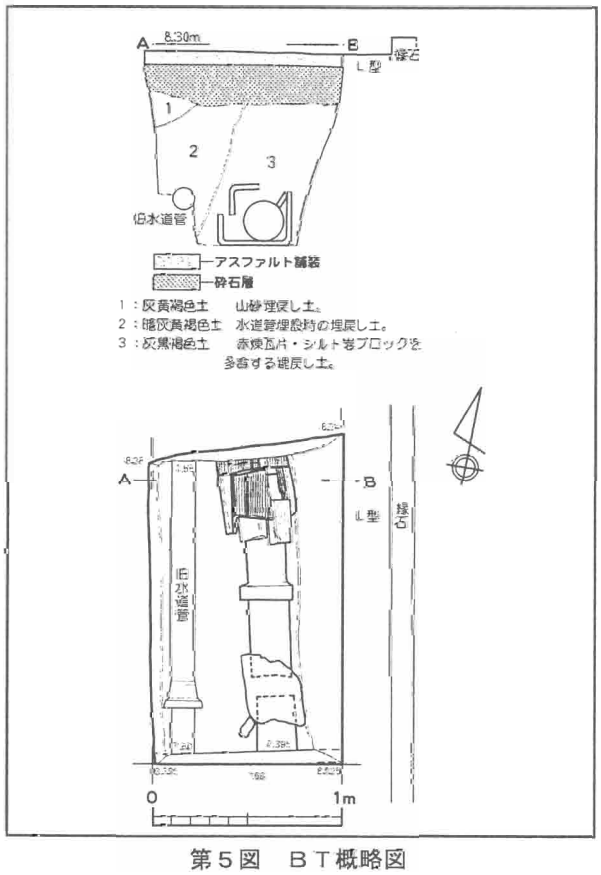
部を結ぶラインで土質が異なり、D4側が新しいと判断された。このことから、土管列が貯水槽に先行し、貯水槽構築時に一部が敷設替えされたものと判断した。

BT（第5図）では、素焼方形ストライプ土管（方形土管）と陶製土管からなるほぼ南北方向の土管列を検出した。方形土管と陶製土管上方の隙間には2個体の煉瓦が詰め込まれていた。東側のものは長手方向に2孔を有するジェラール煉瓦であった。陶製土管は3個体が確認された。受部を南側に向けているが、北から2点目の土管は受部を欠損しており、南側のものとの接続部は陶製土管片で覆われていた。方形土管は、少なくとも2個体が確認されている。これらは、煙道土管の転用品と考えられるものである（写真6）。

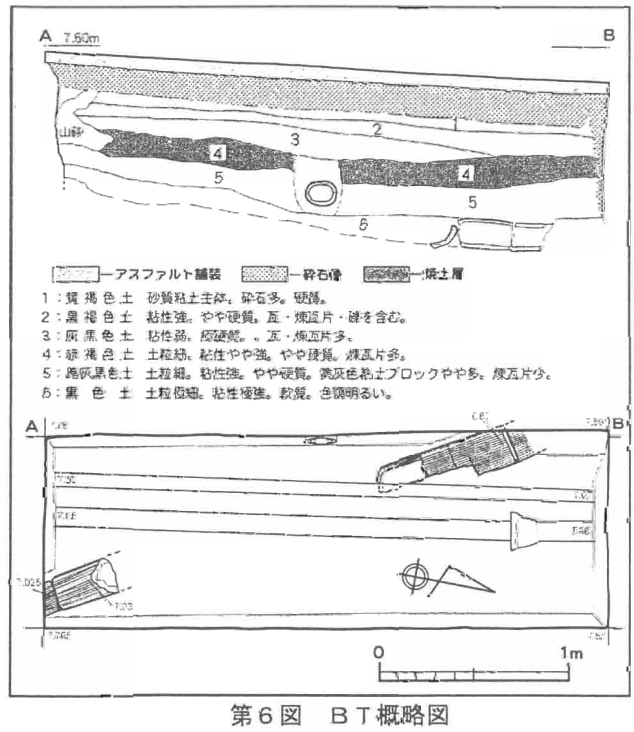
この土管列は、異質な管が接続している点から敷設替えが考えられる。方形土管と南に接続する2点の陶製土管との関係は、方形土管が先行し、これに陶製土管を接続したものと判断される。しかし、一連の作業の中での新旧関係か、方形土管列が先行して存在し、その一部を敷設替えした結果によるものか判断できない。中央の陶製土管が受部を欠き、南側の土管との接続部を別個体の破片で覆っている状況についても、この部分での敷設替えが考えられる。方形土管は、この時の一連の作業で埋設された可能性も考えられる。

方形土管の下端は路面下1m（標高 7.2m）に位置し、このレベルで湧水が見られた。これ以上の掘削を断念したことにより、「第1貯水槽」底面に存在する一対の鉄管引き込み部の貯水槽外側の状況確認の目的は、十分に果たせなかった。

CT（第6図）では、路面下約75cmで南東―北西方向に素焼ストライプ土管列が検出された。中央部は、旧水道管およびガス管埋設時に撤去されていた。土管は、長さ32cm、外径19cmほどを測る（写真7）。径は細身であるが、2T出土のストライプ土管筒部の1/2にあたる。この調査区では、路面下40～45cmに層厚10～15cmの焼土層が存在する。西壁断面では、この焼土層を切って無文素



第5図　BT概略図



第6図　BT概略図

焼土管が確認されている。通りを横断する方向に埋設されており、層位的には、ストライプ土管列よりも明らかに新しい。

貯水槽内の鉄管については、掘削深度が及ばなかったため明らかでない。後日、整備工事でＬ型側溝を撤去した際、当該部の貯水槽外壁の煉瓦がアーチ状に組まれているのを確認している。

（２）「水屋敷通り」の調査結果

通りの西端に沿って径 60cm のヒューム管が埋設されており、大規模に撹乱されていた。中央部で金属管と木管が検出された。

３Ｔでは、通り中央部の路面下 1.35m でコールタールでコーティングされた金属管が検出された。時期は下るものと推定される。

４Ｔでは、通り中央部の路面下 1.2m で、南北方向の木材片、土層断面で木管を確認した。ともに埋設時期を示す手掛かりは得られなかった。

（３）「中間桝」付近の調査結果

ＡＴは、「中間桝」の北側約 7.5m に設定した。調査区西側は、水道管埋設時に大きく撹乱されている。複数の焼土層が存在し、最上層の直上にＩ型を主体とするジェラール瓦片が多量に出土した。これらの瓦片の直上に「煉瓦囲い集石」が検出された。長方形に囲われており、長軸は北東―南西に向ける。その性格は不明である。

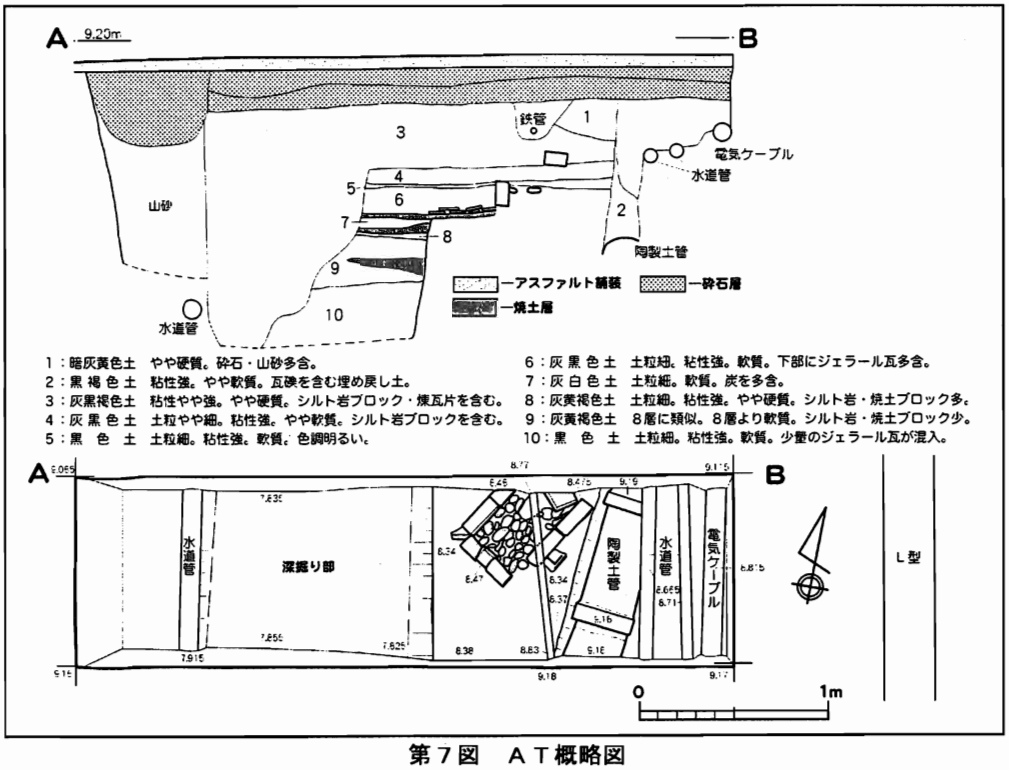
調査区東端部付近には、ほぼ南北方向の陶製土管列が検出された。ＢＴ出土のものより管径が大きい。焼土層を切って埋設されており、「煉瓦囲い集石」よりも新しい。「煉瓦囲い集石」を現状保存することとしたため、中央部の掘削は不十分に終わった。

４　まとめ

明治初期にジェラールが敷設した送水管を確認することはできなかった。管路や相互の関係など今後の課題として残されたが、さまざまな管が埋設されていることが確認できた。とりわけ一群のストライプ土管は、当該地の初期配水施設として位置づけられる可能性が高い。それらは機械による押出し成形であるところから、蒸気機関を備えていたジェラール工場製と考えている。

ＣＴから両面に刻印があるジェラール煉瓦片が出土している（写真８）。片面には『―ARD」の文字が認められる。初出資料である。

文　献：『横浜都市発展記念館紀要』第３号（2007）



第７図　ＡＴ概略図

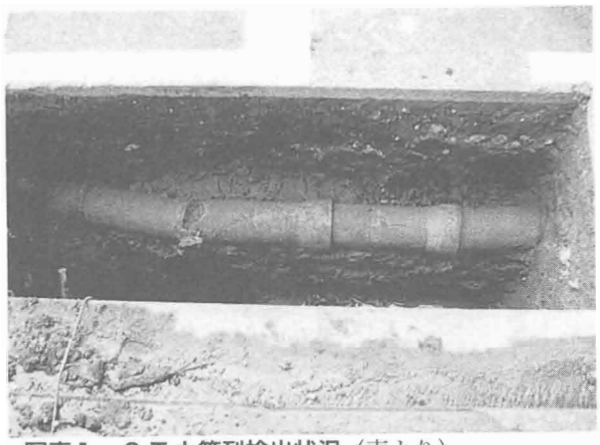


写真１　２Ｔ土管列検出状況（南より）

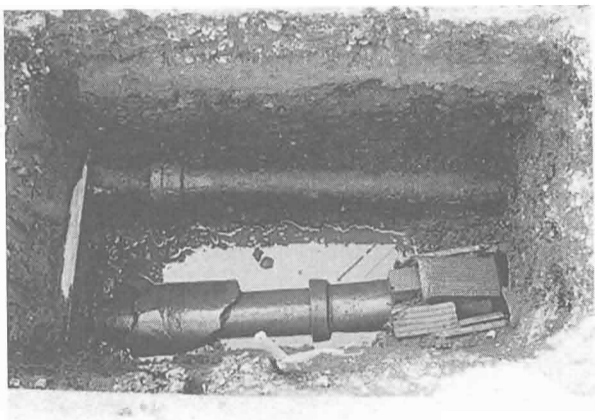


写真２　ＢＴ土管列検出状況（東より）

写真３　ＣＴ土管列検出状況（北より）

写真４　ＡＴ調査区東半部の状況（南西より）

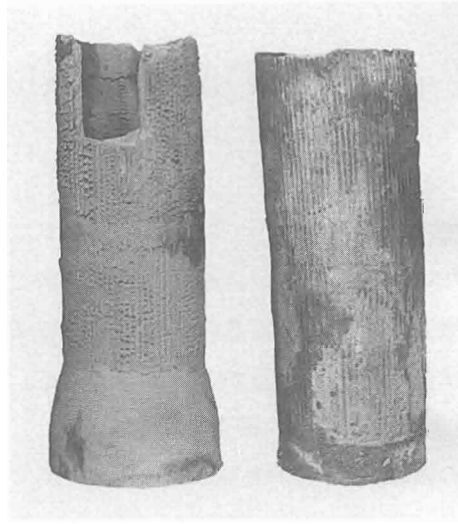


写真５　２Ｔ出土のストライプ土管

写真６　ＢＴ出土の煙道土管

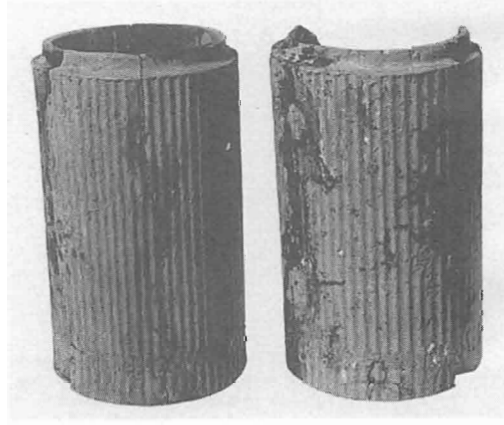


写真７　ＣＴ出土のストライプ土管

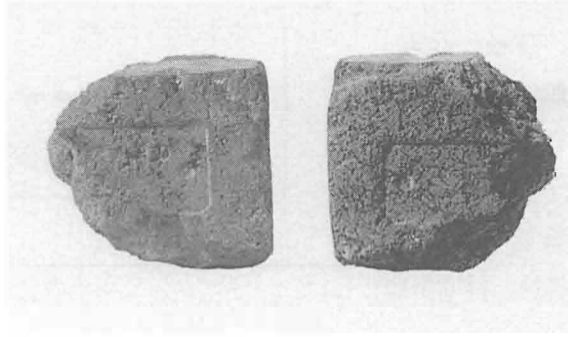


写真８　CT出土の両面刻印煉瓦片

第31回　神奈川県遺跡調査・研究発表会

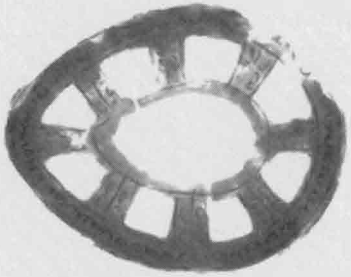
発表会担当役員　◎吉田政行・阿曽正彦・栗田一生・佐々木健策

第31回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨

編　集　第31回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表会担当

発　行　神奈川県考古学会

発行日　2008年（平成20）年1月20日

印　刷　株式会社アルファ　℡　0465－35－5611

まず、師走が迫りご多忙な中、原稿執筆いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。立花さんには連投ありがとうございます。さて、大黒柱の大村さんが役員を退任され、今年度は若輩者のみでの再スタートとなった発表会担当。準備作業も綱渡りのまま、岡本会長をはじめ会役員の皆さんの助けを借りつつ、何とかここまでこぎつけました（霜出さん編集へのご協力お世話様でした）。とはいへ、今年度もやはり大村さんのお世話になってしまいました（深謝）。また、会場準備にあたっては横浜市歴史博物館の平野さんより様々なご支援いただきました。さらに、三ッ橋さん、市川さん、吉成さん、佐瀬さん、渋谷さん、村松さんなど多くの方々にご協力いただきました。皆様方にあらためて感謝いたします。発表要旨や発表会の至らぬ点ありましたら、ご教示よろしくお願い申し上げます。（Masa “I was exhausted” Y.）